

《翻 訳》

A Carta do Vice-Rei da Índia D. Duarte de Menezes  
a Toyotomi Fideyoxi: Perspectiva Japonesa

インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスが豊臣秀吉に送った親書  
——日本側からの考察——

Takase Kôichirô 高瀬 弘一郎

Tradução portuguesa de Hino Hiroshi 日埜 博司訳

© Fundação Cidade de Lisboa

訳者はしがき

訳者がポルトガル大使館文化部に奉職していた1991年秋、ポルトガルのリスボン市財団 Fundação Cidade de Lisboa から文化部宛てに一通の手紙が届いた。手紙には、このたびインド副王ドン・ドゥアルテ・デ・メネゼスが1588年に豊臣秀吉へ送った書翰（現在、京都の妙法院に所蔵される。国宝）を実物大・原色で復刻するので、この書翰を日本側の視角で考察した論文を誰かに執筆していただき、それをポルトガル語に訳して速やかに返送して欲しい旨が記されていた。私どもは躊躇なく、この論文の執筆を慶應義塾大学文学部の高瀬弘一郎教授にお願いした。

本稿は、その折高瀬教授に書いていただいた論文「インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスが豊臣秀吉に送った親書——日本側からの考察——」のポルトガル語訳およびその原文である。

高瀬教授の業績について少し触れることを許していただきたい。

わが国には、日本キリシタン史関係史料の翻訳・研究については明治期以来の長い伝統・蓄積があり、私どもは、村上直次郎・岡本良知・松田毅一・土井忠生らの業績によって、『イエズス会日本年報』や『イエズス会士日本通信』、さらにルイス・フロイス著『日本史』やジョアン・ロドリゲス著『日本教会史』等の基礎史料を、明快な日本語で読むことができる。これらの史料は公開されて信徒の教化に資することを目的とするものであり、こうしたいわば公開性の史料がキリシタン史の研究に果たしてきた役割は無論絶大ではあるものの、しかし、それらが提示するキリシタン像は結局、当然のことではあるが、信者の志操堅固さを始めとする信仰美談から、果ては奇跡・殉教等に彩られた教会の“表向きの顔”だけを反映したものとならざるを得ない。

高瀬教授は、従来ほぼ定説化されてきた教会側史観とは全然異質の、より世俗的にしてリアリティーに富むキリシタン史を再構築しようとの願いを学生時代から懐き、ローマ・イエズス会文書館を中心に所蔵される膨大な教会史料——それらはすべて、当時のポルトガル語・カスティリャ語・イタリア語で記された自筆原稿であり、そこに盛られた内容のデリケートさから、永らく教会外部の俗人には披見が許されなかった、いわば非公開性の文書である——の解説・紹介・研究に努めてこられた。

カトリック教会史観の護持を何よりも優先する歴史家たちが、結果として自分たちの立場を危うくするような“都合の悪い”ことの記されているかも知れぬ、非公開性の史料の紹介に積極的でなかったとしても、それは彼らの立場上むしろ当然であったと言ってよい。それだけに、膨大な未刊史料に基づく新事実の発掘・分析が、高瀬弘一郎という非凡な歴史家によって、世界に先駆けてわが国にお

いて行なわれつつあることの意義は、まことに大であると言わねばならない。

宣教師の生の声を伝える教会史料を通じて、彼が私たちの前に否応なく明らかにしつつあるもの、それは、イエズス会を主体として運営された日本キリシタン教会内部の赤裸々にして驚嘆すべき姿である。具体的に例示するならば、軍事計画に代表されるキリシタン宣教師の世俗的活動、日本教会存立をめぐる経済問題、年代が下るに従って深まった修道精神の退廃と聖職者の墮落、個人的中傷を含む教会内部の人事抗争、日本人聖職者の養成に関する意見の対立、カトリック諸会派の間で見られた日本布教をめぐる主導権争いから、果ては、神父や修道士の女性スキャンダルに至るまでの、従来は到底考えられもしなかったであろうキリシタン史上の諸問題である\*)。

\*) これまでに単行本として刊行された高瀬教授の論文集・啓蒙書・翻訳書は以下の通り。

『キリシタン時代の研究』岩波書店、1977年

『キリシタン時代対外関係の研究』吉川弘文館、1994年

『キリシタンの世紀——ザビエル渡日から「鎖国」まで』岩波書店、1993年

『イエズス会と日本』一、岩波書店、1981年（大航海時代叢書第Ⅱ期6）

『イエズス会と日本』二、岩波書店、1988年（大航海時代叢書第Ⅱ期7）

本論においても、高瀬教授ならではのスリリングな史実の紹介が行なわれている。なかんずく伴天連追放令後の日本における厳しい教会情勢をめぐる、天下人秀吉と、インド副王特使としてのヴァリニャーノとの間に繰り広げられた心理戦というか虚々実々の駆け引きが見事なばかりのリアリティーをもって描き出され、優れて実証的な歴史論文の面白さは、想像とフィクションを綯い交ぜにした時代小説の比ではないことを実感させてくれる。

リスボン市財団の要請によって執筆していただいた標記の論文は、アントニオ・ヴァスコンセロス・デ・サルダールニャ António Vasconcelos de Saldanha 教授の「序文」を付して次の一書に収載された。

*A Carta do Vice-Rei D. Duarte de Menezes a Toyotomi Fideyoxi 1588 : Um Marco Histórico nas Relações Portugal-Japão*, Chaves Ferreira Publicações, S. A. com o patrocínio da Fundação Cidade de Lisboa, s/d.

訳者はポルトガル大使館文化部に奉職していた頃、かの国の研究者が、前記したような教会の“表向きの顔”のみを反映する史料に拠りつつ、キリシタン時代の史実を日本人聴衆を前に得々と講演する姿に接してきた。彼らの仕事を通訳等を通じて助けるのが、業務の一環だったからであるが、九州辺りの聴衆の中には前に挙げたルイス・フロイスの『日本史』などを全編熟読吟味している歴史愛好家も多く、大方の講演は、そのような方々には然したる新味もなかったことであろう。

そのような状況に言い知れぬ滑稽さを感じてきた訳者は、前記した通りの意義を有する高瀬教授の諸論文をなるべく多数、まずはポルトガル語に直してみたいとの希望を持つようになった。

本論のポルトガル語訳が初めて前掲書に出、ポルトガル人研究者の眼に僅かながらでも触れたことは喜びとすべきではあったが、高瀬教授の精緻な記述が、ポルトガル側校閲者によって時に些末なものに見なされたせいであろうか、当方との相談なしに端折られるケースがままあり、論旨に重大な改変の施されてしまう事例が、稀にはあるが生じた。“大使館の業務”として官僚的に作業を急かされたことは事実であるが言い訳にはならず、当方における再査読を敢えて強引に要望しなかったことは、明らかに筆者の責任に属する。

たとえば次のような事例がある。

天正少年使節を伴ってマカオへ戻ってきたイエズス会巡察師ヴァリニャーノは、日本準管区長コエリヨを中心とするイエズス会宣教師たちが、秀吉の伴天連追放令に対抗するため、フィリピンから軍事力を導入して閉塞的な状況を打開しようと企てていることに驚き、彼自身日本へ赴いて、そのよう

な企ての無謀であることを説き、かつ危険な軍事計画を放擲するよう指導した。この記述に続いて高瀬教授は、「〔これは〕巡察師ヴァリニャーノの在日イエズス会士への指示であると同時に、ヴァリニャーノ自身の軌道修正でもある。」という一文を書き加えている。訳者は誤まりなくこれをポルトガル語へ直したはずであるのに、ポルトガル側校閲者はなぜかこれを削除してしまった。

ヴァリニャーノは、前回の第一次日本巡察に際し、コエリョら日本教会の指導者へ、長崎周辺の武備をくれぐれも堅固にしておくように言いつけて日本を去ったのであるから、コエリョはただこの指令に忠実に従っただけであるとも言える、というのが高瀬教授の見解であるにもかかわらず、この一文を端折られては、あたかもヴァリニャーノ自身が終始一貫“武装闘争”には反対であったかのような重大な誤解をポルトガル人読者に与えてしまう。

それやこれやで、高瀬教授の玉稿の趣旨をポルトガル語で伝えきることのできなかった申し訳なきが心にわだかまり、他日補正・増補の機会を得たいと願っていたところ、幸いにして、このたびリスボン市財団より再刊の応諾を得ることができた。所要の加筆・訂正を行ない、高瀬教授の増補稿もむろん新たに訳して、より完全に近い翻訳に日本語オリジナルを付し改めて掲載することにする。

ポルトガル語訳における表記上の注意は次の通りである。

一 日本人の人名は歴史的人物であれ現代人であれ、当然ながら、姓を先に名を後に記す。言わずもなではあるが、欧文においてこの順序を逆にする日本人の一般的習慣が他ならぬ知日派の欧米人には嘲笑されていることの一例として、マーク・ピーターセン著『日本人の英語』（岩波新書、1988年）187～189頁の記述を挙げておく。

二 本論中に現われる歴史上の人物名・地名・年代名・和文史料名の綴りについては、通辞伴天連として著名なジョアン・ロドリゲス著『日本小文典』（マカオ刊、1620年）の採用した綴り字法に基づいて表記し、当時のキリシタン宣教師が習得するよう勧められた京都地方の発音法が浮かび上がる工夫をする。本論に現われる語彙を例示しつつ主な具体的ルールを列挙すれば、次の通り。発音記号については、松村明著『日本語の展開』（『日本語の世界』2）中央公論社、1986年、78～79頁を参照した。

1 「オ」の長音を二種類に区別する。すなわち、「口を開いて発音」（ジョアン・ロドリゲス著『日本大文典』長崎刊、1604年）し、「アウ」に由来する開音の「オー」[o:]を“ô”で、「唇を円く近寄せ口を少しく閉ぢて」（同上書）発音し、「オウ」または「オオ」に由来する合音の「オー」[o:]を“ô”で、それぞれ表記する。例、KiōtoとVôzaca, GamōとVômura等。

2 「ワ」「エ」「オ」は、それぞれ“va”“ye”“vo”と表記し、[wa][je][wo]と発音する。例、vakigatana, Iyemitçu, Yeirocu, Mayeda, Rocuvon等。

3 「セ」「ゼ」は、それぞれ“xe”“je”と表記し、[ɕe][ɕe]と発音する。例、xencocu, Xendai等。

4 ハ行音は、それぞれ“fa”“fe”“fi”“fo”“fu”と表記し、[Φa][Φe][Φi][Φo][Φu]と発音する。例、Farunobu, Fideyoxi, Nifonmatçu等。

5 「ジ」[ji]と「ヂ」[dji]、および「ズ」[zu]と「ヅ」[dzu]の発音の違いを表わすため、それぞれ表記上の区別を施す。例、VdaijinとTengicu, ZuifôとXimadzu等。

6 「ウ」は“v”と表記し、[u]と発音する。例、Vgisato, Vcon等。

7 「ギ」「ゲ」は、それぞれ“gui”“gue”の代わりに“ghi”“ghe”と表記し、[gi][ge]と発音する。例、Yoxixighe, Gheny等。

三 日本の太陰暦をポルトガル語で表記する場合、ルイス・フロイスが『日本史』において用いた方法を踏襲する。

四 日本に興味を持つポルトガル人が好んで使う *nipónico* (*nipónica*) という形容詞についてであるが、これは言うまでもなく、日本人の自称である *Nippon* に由来する。訳者は日本人の自称が、たとえ悪意を含まなくとも、外国人によって馴れ馴れしく使われることは好ましくないと考えるので、ポルトガル側校閲者が用いた前記の形容詞は一律に *japonês* (*japonesa*) へ戻す。

日本語テキストには次の手続きに従って校訂を施した。

一 *A Carta do Vice-Rei D. Duarte de Menezes a Toyotomi Fideyoxi 1588 : Um Marco Histórico nas Relações Portugal-Japão* に収められたものは縦書きであるが、ポルトガル語訳と併せて記載するための便宜として横書きに変更した。

二 日付については、和暦は漢数字で、洋暦はアラビア数字でそれぞれ記述した。

三 註については、ポルトガル語訳と日本語原文とを一括して掲げた。

なお、前掲書においてポルトガル語・カスティリャ語の未刊史料の翻字を行なったのは、リスボン大学で古文書学 (ポルトガル語で *paleografia*) を学んだ小磯京子女史である。今回、この点の再検討も高瀬教授と小磯女史に行なっていただいたことを有り難く銘記する。特に小磯女史には、古い語彙の綴り方、綴り字記号の打ち方、大文字から小文字への変換(あるいはその逆)、略語の取り扱い等々、未刊史料の翻字を行なうために必要とされる一定の手続きなりルールなりを明示してもらったのであるが、ここでそれを列挙することは避ける。本論の主たる狙いは *paleografia* そのものにはないからであるが、訳者としては、引用される未刊史料の内容を読者へ正しく伝えることこそ第一義であると考え、そのために適切であると思われる処置を施していただいた。

新たに増補・訂正した拙訳の読み直しについては、リスボン新大学 (Universidade Nova de Lisboa) 社会人文学部助手で日欧交渉史の新進研究者であるジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ (João Paulo Oliveira e Costa) 氏と、ポルトガル大使館文化部のかつての同僚碇マルガリーダ史子さんとお話し、貴重な教示を戴いた。篤くお礼申し上げます。

### ポルトガル語訳

## A Carta do Vice-Rei da Índia D. Duarte de Menezes a Toyotomi Fideyoxi : Perspectiva Japonesa

Takase Kōichirō

Tradução portuguesa de Hino Hiroshi

© Fundação Cidade de Lisboa

### Notas do tradutor :

- 1 Na presente tradução, quer no que diz respeito aos nomes de figuras históricas, quer de personalidades contemporâneas, o apelido surge antes do nome próprio de acordo com o uso japonês.
- 2 Todos os nomes de figuras, eras, lugares e documentos históricos japoneses que constam neste ensaio, seguem, em princípio, a grafia usada pelo Pe. João Rodrigues Tçuzu na sua *Arte Breve da Língua Japoa*, (Macau, 1620) a fim de representar o mais fielmente possível a pronúncia-padrão da língua japonesa quinhentista delicadamente diferente da pronúncia de hoje. Sigo as seguintes regras ao transcrevê-los :

- (a) Distingue-se a diferença fonética entre “ō” com a boca aberta (アウ) [ɔ:] e “ô” com a boca um pouco fechada, ajuntando-se os beijos em roda (オウ ou オオ) [o:]. Exemplos: Kiōto e Vôzaca, Gamō e Vômura, etc.
- (b) As sílabas actuais “wa” (ワ) “e” (エ) “o” (オ) se grafam respectivamente como “va” “ye” “vo”. Exemplos: vakigatana, Iyemitçu, Yeirocu, Mayeda, Rocuvon, etc.
- (c) As sílabas actuais “se” (セ) e “ze” (ゼ) se grafam respectivamente como “xe” e “je” e se pronunciam como [ʃe] e [ʒe]. Exemplos: xencocu, Xendai, etc.
- (d) As sílabas actuais “ha” (ハ) “he” (ヘ) “hi” (ヒ) “ho” (ホ) e “hu” (フ) se grafam respectivamente como “fa” “fe” “fi” “fo” e “fu” e se pronunciam como [fa] [fe] [fi] [fo] e [fu]. Exemplos: Farunobu, Fideyoxi, Nifonmatçu, etc.
- (e) Distingue-se a diferença fonética respectivamente entre “ji” (ジ) [ʒi] e “gi” (ヂ) [dʒi], “zu” (ズ) [zu] e “dzu” (ヅ) [dzu]. Exemplos: Vdaijin e Tengicu, Zuifô e Ximadzu, etc.
- (f) A sílaba “u” (ウ) se grafa como “v” e se pronuncia como [u]. Exemplos: Vcon, Vgisato, etc.
- (g) As sílabas “gui” (ギ) e “gue” (ゲ) se grafam respectivamente como “ghi” e “ghe” em vez de “gui” e “gue”. Exemplos: Yoxixighe, Gheny, etc.
- 3 As referências ao antigo calendário lunar japonês seguem a forma utilizada pelo Pe. Luís Fróis na sua *Historia de Japam*.

## I

As relações luso-japonesas datam dos 11 anos da era Tenmon (天文), isto é, de 1542 com a chegada de três portugueses à ilha de Tanegaxima (種子島) e duraram aproximadamente um século. Neste pequeno ensaio pretendo esclarecer o significado histórico da carta enviada pelo vice-rei D. Duarte de Menezes em 1588 a Toyotomi Fideyoxi. Os contactos entre Portugal e o Japão nos séculos XVI e XVII, que demoninamos de relações luso-japonesas, nunca foram directos mas estabelecidos através dos comerciantes que realizaram o trato ou dos missionários que tentaram difundir a fé católica. O principal agente destas relações, para além dos mercadores e missionários embarcados nos navios portugueses provenientes de Macau, está personificado na figura do capitão-mor da viagem do Japão. Este, não sendo um mero comandante, era investido nas funções do governador de Macau enquanto o navio ali permanecia e reconhecido como magistrado máximo dos portugueses durante a estadia no Japão. A sua autoridade não ultrapassa a sociedade portuguesa pelo que é difícil conhecer claramente as atitudes e comportamentos dos reis de Portugal para com as relações comerciais e missionárias.

Exemplo do contacto directo entre os soberanos portugueses e japoneses na exacta acepção da palavra é a missão de Gonçalo Siqueira de Sousa enviada pelo rei D. João IV ao rei (ou imperador) japonês em 1647 com o objectivo de reatar os contactos entre ambos os países<sup>1)</sup>. Só após o corte definitivo das relações comerciais com o Japão é que o soberano português enviou pela primeira vez uma missão ao rei japonês, ou melhor dizendo, ao xōgun\*) (Tocugava Iyemitçu 徳川家光), o que constitui, segundo creio, uma especificidade das relações luso-japonesas de então. Outro caso de contacto entre soberanos é a carta de D. Duarte de Menezes a Toyotomi Fideyoxi, que como vice-rei da Índia representava todo o Estado da Índia Oriental.

\*) A palavra “xōgun” ou “xogum” existe no vocabulário português actual. “No Japão, até meados do séc. XIX,

chefe militar com poderes não raro superiores aos do imperador.” (Aurélio Buarque de Holanda Ferreira, *Novo Dicionário da Língua Portuguesa*, Rio de Janeiro, Editora Nova Fronteira, segunda edição, 1986, p.1800)

Foi na época xencocu (sengoku 戦国, segundo a pronúncia actual), período em que o Japão estava dilacerado por conflitos internos entre senhores feudais, que o rei de Portugal enviou várias cartas pessoais aos daimiō (大名<sup>\*)</sup> da ilha de Kiūxū (九州), como sejam as missivas do rei D. Sebastião a Vôdomo Sôrin (大友宗麟), escritas respectivamente em 1558 e 1562<sup>2)</sup>, ou a Vômura Sumitada (大村純忠) escrita em 1563<sup>3)</sup>. Também da parte de alguns daimiō, como a que Arima Farunobu (有馬晴信) enviou através dos quatro jovens embaixadores de Kiūxū<sup>4)</sup> ou a que Vômura Sumitada dirigiu ao dito soberano<sup>5)</sup>, recebeu o rei de Portugal diversas missivas. (Conhecemos ainda uma outra carta que o rei de Satçuma (薩摩) de nome Ximadzu Tacafisa (島津貴久) dirigiu não ao rei de Portugal mas ao vice-rei da Índia aos 4 anos da era Yeirocu (永祿), isto é, em 1561<sup>6)</sup>.) Não se pode no entanto afirmar que esses contactos com senhores locais se tratassem de relações entre soberanos o que reforça a importância da carta de D. Duarte de Menezes.

\*) A palavra “dâimio” ou “daimiō” existe no vocabulário português actual. “Designação comum aos príncipes feudais japoneses, que perderam os seus privilégios na revolução de 1868.” (Aurélio Buarque de Holanda Ferreira, *Novo Dicionário da Língua Portuguesa*, p.518)

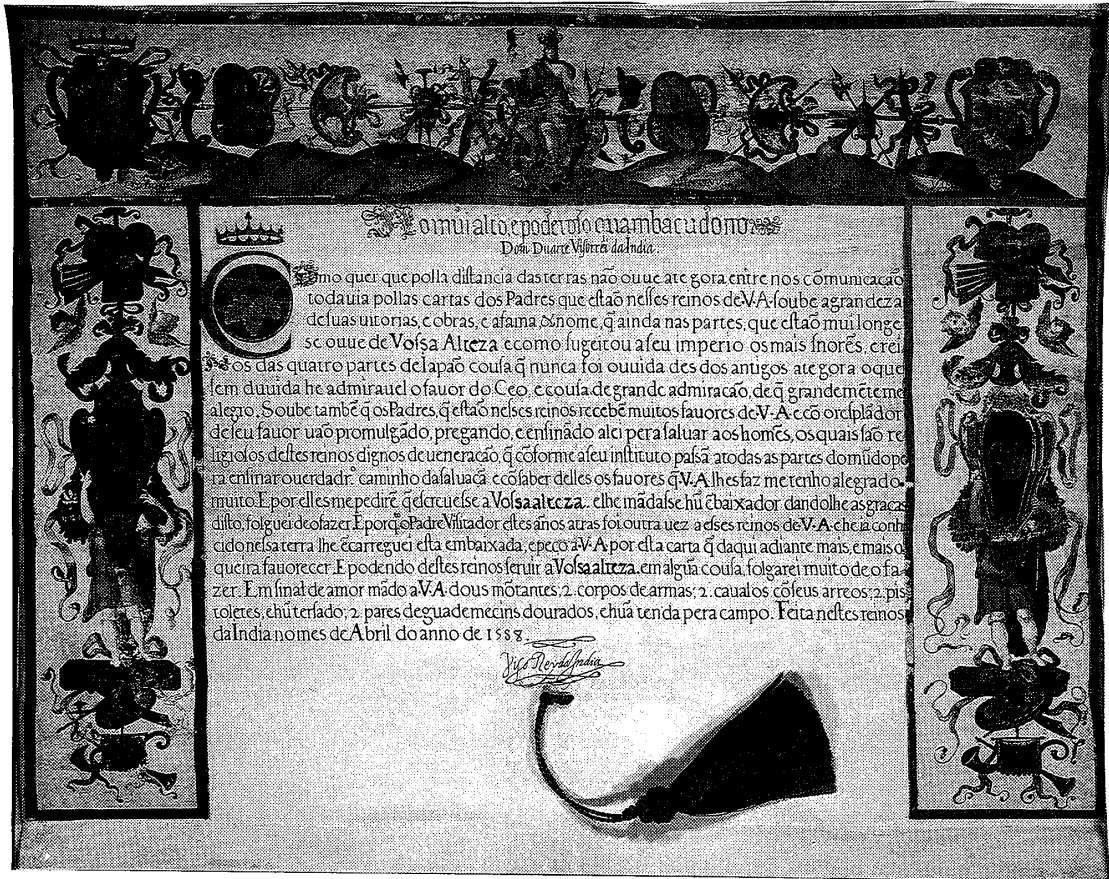
\* \* \*

Curioso será ainda analisar o conteúdo das cartas trocadas entre o rei de Portugal e os daimiō de Kiūxū. A Vôdomo Sôrin em 1558, D. Sebastião agradece a protecção concedida aos missionários jesuítas e pede que esse apoio perdure. Noutra carta datada de 1562 e dirigida ao mesmo daimiō, D. Sebastião aconselha-o a converter-se ao Cristianismo. Ao escrever a Vômura Sumitada em 1565, o mesmo soberano português diz-se agradecido a Deus por saber da conversão dele. Arima Farunobu, na carta datada de 1582 e dirigida ao rei de Portugal, exprime os seus sinceros agradecimentos pela expansão da fé católica promovida pelos missionários jesuítas no seu território, enquanto Vômura Sumitada, na carta datada de 1582 e dirigida ao mesmo rei, expressa a sua satisfação pela missionação jesuíta e pede-lhe o seu melhor patrocínio. (A carta de Ximadzu Takafisa dirigida ao vice-rei da Índia em 1561 tem por objectivo transmitir-lhe o seu desejo de promover o intercâmbio com o Estado da Índia Oriental.)

Assim, numa palavra, as cartas trocadas entre o rei de Portugal e os daimiō de Kiūxū versam unicamente da missionação católica não abordando nenhum assunto concreto. Trata-se pois de missivas de cortesia sem conteúdo substancial, ao contrário do caso da missão de 1647, cujo objectivo é claro mas que não levou a carta assinada pelo rei.

Que significado atribuiria então a missiva do vice-rei D. Duarte de Menezes a Fideyoxi em 1588? Pode-se dizer que esta carta tem basicamente as mesmas características daquelas enviadas pelo rei de Portugal aos daimiō de Kiūxū. Nesse documento, o vice-rei exalta Fideyoxi, transmite a sua satisfação pela “protecção” dos missionários, solicita-lhe a melhor consideração para com estes e anuncia o envio do Padre Visitador (Alessandro Valignano) em sinal do seu reconhecimento. A missiva é bem longa e cerimoniosa mas basicamente é igual às ditas cartas protocolares e de saudações em torno da missionação católica<sup>7)</sup>.

Ainda que não o possamos ignorar, o texto da missiva do vice-rei só tem importância secundária no que concerne à missionação. Mais importante será considerar a reacção do Governo de



Carta do Vice-Rei da Índia D. Duarte de Menezes a Toyotomi Fideyoxi (Templo Myôhoin, Kyôto. Patrimônio Nacional do Japão)  
豊臣秀吉宛ポルトガル国印度副王親書 (妙法院蔵。国宝)

Toyotomi para com a missão e o valor histórico da sua missiva observado quer do ponto de vista diplomático daquele Governo quer no contexto de um século de relações luso-japonesas.

## II

Na viagem de regresso ao Japão juntamente com os quatro jovens embaixadores e investido na qualidade de enviado do vice-rei, o padre Alessandro Valignano chegou a Macau a 28 de Julho de 1588<sup>9)</sup>. Aí tomou conhecimento de como o vice-provincial padre Gaspar Coelho, de comum acordo com os seus seguidores, tivera intenção de resistir às perseguições de Fideyoxi pelas armas bem assim como do édito anti-cristão decretado por Toyotomi Fideyoxi a 24 de Julho de 1587, isto é, 19 dias da sexta lua dos 15 anos da era Tenxô (天正). Com base na carta de Valignano escrita de Macau a 12 de Junho de 1589, de que cito alguns parágrafos, era convicção deste que os projectos militares do padre Coelho teriam suscitado a ira de Fideyoxi e provocado o dito decreto.

Este año assí en Jappô como en la missiõn de la China huvo muchos y grandes trabaios, y parece que Nuestro Señor con particular providencia ordenó que yo me hallasse en este puerto de la China, para poder resolver y determinar diversas cosas, en las quales se hallaran los Padres desta casa y de la missiõn de la China, y también algunos que vinieron de Jappô con grande perplexidad y cõfusiõn si yo no me hallara aquí. De Jappõn allende de tres hermanos

que vinieron el año passado para se ordenar, y per no hallar aquí el Obispo, no pudieron en el mismo año bolvir a Jappón y otro que también vino este año para se ordenar aquí. Los quales como dixe, irán agora conmigo. Vino también el Padre Belchior de Mora que fue en Jappõ mucho tiempo Superior de la Casa de Arima, y después también del Ximo (下)\*), el qual embió el Padre Vice Provincial para que hallandome aquí, me diesse llena información de lo que passava en Jappõ, y de los remedios que allá se offreçió al Padre Viceprovincial y algunos otros que se deurjan [sic. devian?] de procurar assí con el Governador de las Phelippinas como con Su Magestad para asegurar la christiandad de Jappón y siendo caso que yo fuesse muerto, o no me hallasse aquí, fuesse derechamente a tratar de lo [sic.] dichos remedios con el Governador de las Phelippinas, y de allá se fuesse por la Nueva España a tratar con Su Magestad y a dar a Vuestra Paternidad llena información de las cosas de Jappón ; mas por que los remedios de que se tratava me pareçieron no solo inconvenientes mas por la una parte muy peligrosos y por la otra infatibles, no me pareçió que se hablasse, ni tratasse dellos.

\*) Parte occidental da ilha de Kiúxú.

Y assí determiné que el dicho Padre Belchior de Mora bolviesse conmigo a Jappón y que, ya que Vuestra Paternidad me embiava aý, tratassemos allá primero en legítima congregaçión lo que occurria para tratar, y viessemos tâbién primero lo que aprovecharia mi yda con los cavalleros iappones con la embaxada y presentes que llevamos a Quabacũdono\*) en nombre del Virrey, ya que él nos mandó Provisión para ir con la dicha embaxada, y entonces si fuere neçessario, se podrá en la congregaçión escoger un que vaya por Procurador a Roma a tratar primero con Vuestra Paternidad de todo lo que se offreciere antes de hablar ni con el Rey, ni con los ViReis de los remedios que se offreçen para el bien de Jappõ.

\*) Quambacudono (關白殿). Título honorífico de Toyotomi Fideyoxi (豊臣秀吉).

Quanto más que aquellos de que tratavan aora, no eran a mi pareçer ni los convenientes ni los verdaderos, y antes nos podrian ser mui peligrosos quando se pudiessen alcançar, lo que yo también no creo. La sũma destes remedios era pedir a Su Magestad una guarniçión de hasta trezientos o quatroçientos soldados españoles que hiziessen una fortaleza en Jappón, pareciendo al Padre Vice Provincial y algunos otros que con esto se asseguraría la christiandad de Jappón. Y para que esto se hiziesse más deprissa, embiavan a pedir este socorro al Governador de las Phelipinas, el qual Remedio no solo me parece que es inconveniente tratarse e procurarse por nos otros, y que tiene muchas dificultades y también impossibilidades de salir como el Padre Vice Provincial imagina, mas totalmente se me offreçe por mui peligroso y dañoso para lo que pretendemos para la conversión de Jappõ y esto lo tengo por tan çierto. [.....]

[.....] La persecuçión, aunque no se llevõ adelante con todo rigor, todavía hasta aora dura y parece que durará emientes [sic.] este tirano viviere, todavía puede ser que con esta embaxada y presiente [sic.] que el ViRey le manda y con la ida destes cavalleros jappones aya en él alguna mudança. Aunque como él tiene su prora en se hazer adorar y querer ser tenido por Cami, mal se podrá nunca concertar con los otros. Mas como Jappõ es tierra de continuas mudanças y que en un [sic.] ora se rebuelve todo, puede ser que en llegando a Jappón, hallemos muchas mudanças, y en todas ellas confio en Nuestro Señor que siempre la christiandad irá creçiendo y tomando mayor vigor, [.....]<sup>9)</sup>



Esta carta dá-nos bem a percepção que o padre Valignano teve sobre a precária situação da Igreja Católica no Japão e sobre as ameaças que caíam sobre as relações luso-japonesas depois de tomar conhecimento do édito anti-cristão decretado por Fideyoxi. As informações bastante exactas que teve sobre a situação foram, segundo creio, transmitidas a Valignano pelos irmãos jesuítas que do Japão vieram a Macau para serem ordenados padres e bem assim como do Pe. Belchior de Mora que chegara nessa ocasião para despachar um importante negócio. Do texto da carta poderemos extrair os seguintes pontos importantes :

- 1 A Companhia de Jesus, através da reacção do Pe. Coelho, intentava enviar emissários ao rei de Portugal (e de Espanha) e ao Governador das Filipinas apelando para a ajuda de três a quatro centenas de soldados espanhóis e para a construção de uma fortaleza a partir da qual enfrentariam o inimigo japonês.
- 2 Este projecto militar foi rejeitado por Valignano que o tinha não só por impossível mas também por perigoso. Ele decidiu levar o Pe. Mora ao Japão e convocar uma consulta que ponderasse o pedido de uma audiência a Fideyoxi. Nessa audiência aproveitando o regresso dos quatro jovens embaixadores, Valignano seria portador de uma missiva e vários presentes do vice-rei.
- 3 Valignano, segundo parece, esperava que, sendo recebido por Fideyoxi na qualidade de emissário do vice-rei, pudesse melhorar a situação em torno da Companhia de Jesus no Japão.

A preparação da missiva e dos presentes do vice-rei foi anterior à promulgação do édito anti-cristão, razão pela qual se afigura assaz despropositada e estranha. Meramente cerimoniosa e protocolar esta carta assume afinal um importante significado, pois Valignano aproveitando a audiência concedida para a sua entrega procurou de Fideyoxi uma atitude mais tolerante para com os jesuítas.

### III

Valignano chegou a Nagasaki (長崎) a 21 de Julho de 1590. Entre 13 e 25 de Agosto do mesmo ano presidiu à consulta de Cadzusa (加津佐) para resolver todos os problemas até então enfrentados. Aí se deve notar que o Padre Visitador aconselhou os seus colegas a desistirem do recurso às armas no processo da evangelização e optarem por relações mais prudentes para com Fideyoxi e com os poderosos japoneses. Trata-se, ao mesmo tempo, da alteração do seu próprio modo de pensar anteriormente concebido<sup>10</sup>. Valignano acalentava ainda a esperança de que a audiência com Fideyoxi permitisse uma alteração da sua política de afrontamento ao Cristianismo e Fideyoxi, segundo parece, mostrou-lhe ares que fizeram com que o Padre Visitador tivesse tal esperança. Isso se depreende da carta que escreveu de Nagasaki a 12 de Outubro de 1590.

[.....] Se puede dezir desde agora, que todo el Remedio que esperamos alcançar para aplacar Quambaquodono, y acabarse esta persecución que de tres años a esta parte movió contra la christiandad y contra los Padres está encostada y fundada sobre esta misión, porque allende del testigo que estos cavalleros podran dar demás cosas, con que se entendra la Verdad, y se quitarán las sombras y imaginaciones, que por ventura movieron a Quambaquodono a levantar esta persecución con la buelta dellos tan favorecidos como vinieron de Europa se ordenó con

el Virey de la India que embiasse con esta ocasión una embaixada [sic.] con un presente al dicho Quambaquodono, encargando la dicha embaixada [sic.] a nos otros y con los cavallos que el Virrey dio con otras algunas cosas y algunas pieças ricas que ellos acreçentaron de las que traxeron de Europa, se ordenó un rico presente, el qual sin esta ocasión no se pudiera ca ninguna manera ordenar.

Y aunque quando partimos de Goa, no se sabia nada desta persecuçión y veniamos con este presente y embaixada solo por dar las graçias a Quambaquodono de los favores que hazia entonces a los Padres y a los christianos, todavia la providençia divina que sabia lo que passava ordenó todo con suave y paternal disposiçión a este fin de alcançarse el Remedio desta persecuçión, [.....]

Y como este hombre es gentil y todo su bien cré que está en esta vida, agora que es señor universal de Japón, no desea otra cosa que dexar fama y nombre perpetuo de sy, y asy estima por honrra y fama mui grande venirle desde la India este presente con tan solenne embaxada, cosa que nunca aconteció hasta agora a otro señor de la Monarchia de Japón (como ellos llaman), pareciendole que con esto se entiende en Japón quan conocido y estimado es su nombre, pues desde dos mil leguas le embia a visitar tan grande señor y como esto le contentasse tanto luego, que oyó agora dos años que yo venia con esta embaixada, estando mui furioso y bravo contra la christiandad y contra los Padres se vio muy claramente que amansó e dio una provisión en que mandava que yo fuesse con la dicha embaxada, y assi sabiendo, según se cré que quedaron todos los Padres en Japón contra su mandado en las tierras del Rey de Arima (有馬), y de Omura (大村), y de Amacusa (天草), dissimuló con los dichos señores y con los Padres como se no supiera que estaban en Japón y contentó se con saber que bivian los Padres más encogidos y con las vestiduras algo más mudados [sic.] de lo que primero ivan, aun que [sic.] de todos eran conocidos y tratavan tan publicamente sus ministerios con los christianos, y también la converçión de los gentiles que convirtieron nestes tres años a nuestra sancta fee más de treinta sinco mil gentiles, baptizando los todos, lo qual en ninguna manera podera dissimular si no fuera con la esperanza desta embaxada.

Y agora que llegamos aqui, haziendole saber de nuestra llegada y diziendo se le abiertamente que venía con esta embaxada el mismo Padre Visitador que agora ha dez años vino otra vez a Japón al tiempo de Nobunanga (信長), y era Superior de todos los Padres, mostró alegrarse mucho y mandó que logo que fuesse buelto de la guerra a Miaco (都), yo fuesse para allá con la dicha embaxada, y Assano Danjō (Nagamasa 浅野弾正〔少弼〕長政) que es señor de un Reino y el más privado y estimado de Quambaquodono, ordenó que embiasse embarcaçiones para nos llevar, y quién nos acompañasse y haziesse por el camino honras y agazalhado. Y conforme a la voz comun de todos christianos y gentiles ya se da esta persecuçion por acabada, y que con esta embaxada quedará em paz con nosotros, [.....]

Para que esta embaxada fuesse mejor reçebida de Quambaquodono y con maior su honrra, pareció asi a los señores chirstianos, como a los Portugueses, y a los Padres que pues esta embaxada iba en nombre del Virrey, fuessen comigo algunos Portugueses que vinieron en la nave, y assi van ocho dellos [.....]<sup>11)</sup>.

Através desta carta podemos confirmar a esperança de Valignano e dos padres jesuítas na desejada alteração da política de Fideyoxi contra a Igreja Católica. A missiva do vice-rei, redigida originariamente para agradecer a “benevolência” de Fideyoxi para com a missão católica e do mesmo teor das anteriormente dirigidas aos daimiõ cristãos de Kiûxû, devido à alteração inesperada da situação política, chegou a ter um significado diferente. O envio da dita missiva de tão remotos lugares pelo vice-rei, assim satisfazendo o orgulho do senhor universal do Japão, segundo pareceu a Valignano, mostrou-se extremamente proveitoso.

De acordo com Valignano, Fideyoxi teve conhecimento dessa missão dois anos antes, isto é, em 1588 e desde que soube da preparação dessa missão, fechou os olhos às actividades missionárias apesar de saber que os jesuítas permaneciam no Japão contrariando o seu decreto. Assegura ainda Valignano que se não fora o envio dessa missão o mesmo não teria acontecido de modo nenhum. Quando soube da chegada ao Japão do Padre Visitador na qualidade de enviado do vice-rei, Fideyoxi ficou contente e pediu-lhe que fosse a Kiôto (京都) assim que ele regressasse da guerra que o opunha contra o clã Fôgiô (北条) de Odavara (小田原). Fideyoxi, partindo de Kiôto a 5 de Abril (1 dia da terceira lua dos 18 anos da era Tenxõ), chegou a Odavara a 6 de Maio (3 dias da quarta lua). Após três meses do cerco do castelo de Odavara, se rendeu aquele clã a 4 de Agosto (5 dias da sétima lua), se realizando assim praticamente a unificação de todo o território japonês por Fideyoxi. Fideyoxi partiu de Odavara a 16 de Agosto (17 dias da sétima lua) do mesmo ano para conquistar os reinos de Mutçu (陸奥) e Deva (出羽). Tendo subjugado vários locais na região do Nordeste, Fideyoxi entrou no castelo de Curocava (黒川, isto é, actual Aizuwakamatsu 会津若松) a 7 de Setembro (9 dias da oitava lua) e partiu daí a 10 de Setembro (12 dias da oitava lua), regressando triunfantemente a Kiôto a 29 de Setembro (1 dia da nona lua)<sup>12)</sup>.

Como já mencionei, Valignano chegou a Nagasaki a 21 de Julho de 1590 e já confirmamos, através da carta de Valignano datada a 12 de Outubro de 1590, que Fideyoxi mandou o Padre Visitador ir a Kiôto assim que regressasse triunfantemente à capital. É de crer, portanto, que Fideyoxi tivesse tido notícia da chegada de Valignano quando estava em Odavara. Asano Nagamasa (浅野長政), cujo título oficial era Danjô Xôfit (弾正少弼), um dos acompanhantes na campanha contra o clã Fôgiô foi enviado ao reino de Mutçu a 4 de Agosto (5 dias da sétima lua)<sup>13)</sup>. Segundo a citada carta de Valignano, Asano Nagamasa foi mandado a preparar o navio e os acompanhantes que haveriam de trazer Valignano à capital e Fideyoxi, segundo penso, transmitiu aquelas instruções ao seu privado provavelmente durante a estadia em Odavara e antes do dia 4 de Agosto.

A conquista dos reinos do Nordeste, porém, foi bastante difícil devido a uns rebeliões de lavradores e à discordia entre Date Masamune (伊達政宗) e Gamõ Vgisato (蒲生氏郷), os dois senhores mais poderosos na mesma região, razão pela qual Asano Nagamasa foi obrigado a deter-se em Nifonmatçu (二本松) por largo período, pelo que a preparação do navio não foi afinal feita por ele<sup>14)</sup>.

\* \* \*

Valignano e a sua missão chegaram a Kiôto em Dezembro de 1590 provenientes de Nagasaki de onde teriam partido no início desse mês ou em finais de Novembro<sup>15)</sup>. No dia 3 de Março de 1591 (8 dias da primeira lua bissexta dos 19 anos da era Tenxõ), Valignano foi finalmente recebido por

Fideyoxi em audiência no Palácio Iuracutei (聚楽第) em Kiôto<sup>16)</sup>.

Tanto a viagem de Nagasaki a Kiôto, como a audiência no Palácio Iuracutei foram descritas pormenorizadamente pelo Pe. Luís Fróis<sup>17)</sup>. De acordo com a citada carta de Valignano de 12 de Outubro de 1590, ele foi aconselhado pelos daimiõ cristãos assim como pelos jesuítas e demais portugueses, a fazer-se acompanhar pelos tripulantes portugueses para emprestar maior dignidade e significado à missão, o que é confirmado por Fróis na *Historia de Japam*. Segundo este jesuíta, os daimiõ Curoda Yoxitaca (黒田孝高) e Conixi Yukinaga (小西行長) escreveram a Valignano aconselhando-o a dar maior relevo à representação de seculares portugueses em detrimento dos padres, conselho esse que foi dado também por Arima Farunobu (有馬晴信) e Vômura Yoxiaki (大村喜前)<sup>18)</sup>. Curoda Yoxitaca converteu-se ao Cristianismo em 1585 (13 anos da era Tenxõ) e foi um dos maiores protectores da Igreja Católica depois de Tacayama Vcon ter sido desterrado na seqüência do édito anti-cristão de 1587<sup>19)</sup>.

Curoda Yoxitaca fez vários esforços em favor da Companhia de Jesus para que saísse bem a audiência de Valignano com Fideyoxi<sup>20)</sup> e tanto ele como Conixi Yukinaga fizeram-lhe o dito conselho, escusado dizer, para diminuir a representação religiosa.

A missão de vinte e nove elementos era constituída pelo Pe. Visitador Valignano, Pe. Diogo de Mesquita, Pe. António Lopes, treze tripulantes portugueses, os quatro jovens embaixadores e os sete criados portugueses e ainda o irmão português Ambrósio Fernandes como o intérprete e o irmão João Rodrigues, intérprete do Pe. Visitador<sup>21)</sup>.

Segundo Valignano, Fideyoxi recebeu com satisfação a notícia da visita do representante do vice-rei. A ser verdadeira esta informação traduz a primeira reacção de Fideyoxi em Odavara, o qual, após o regresso em triunfo a Kiôto, assumiu uma atitude mais fria, dando razão aos conselhos de Curoda Yoxitaca e Conixi Yukinaga. Sobre as circunstâncias que envolveram a missão de Valignano, Fróis relata-nos: “Neste tempo, como a ley de Deos tem em Jappão muitos emulos e intimos adversarios, comessarão alguns a dar falsas informações a Quambacu, e comessou elle a suspeitar que poderia ser fingida esta embaixada, e que fosse invensão dos Padres para com isto o persuadirem e alcançar sua restituição ; [.....]”<sup>22)</sup>.

#### IV

É impossível dissociar a reacção de Fideyoxi à missão enviada pelo vice-rei da Índia de outras recebidas em igual período de vários países asiáticos. Pouco antes da audiência de Fideyoxi a Valignano tinha sido recebida uma missão coreana que era portadora de uma missiva e de vários presentes. A corte coreana enviara já anteriormente três missões durante o período do Xogunato de Axicaga (足利), a última das quais em 1443, isto é, 3 anos da era Cakitçu (嘉吉), sempre com o objectivo de felicitar a sucessão de novo xõgun (將軍) e de pedir-lhe que reprimisse as actividades dos corsários japoneses. Os xõgun de Axicaga recebiam as missões, compreendendo exactamente o seu objectivo acima mencionado. Durante o governo de Toyotomi Fideyoxi a corte coreana enviou duas missões respectivamente em 1590, ou seja, 18 anos da era Tenxõ e 1596, ou seja, 1 ano da era Keichõ (慶長). Escusado dizer que a missão em questão é a primeira enviada com um intervalo de 147 anos. Ao contrário das missões enviadas durante o período do Xogunato de Axicaga, surgiu aqui uma divergência entre os dois países quanto às suas respectivas intenções.

Explico as circunstâncias acerca do envio da missão em questão.

A primeira vez que Fideyoxi manifestou a sua intenção de conquistar a China foi no outono de 1585 (13 anos da era Tenxō)<sup>23)</sup> e isso mesmo revelou ao Pe. Gaspar Coelho, vice-provincial da Companhia de Jesus, quando o recebeu em Maio de 1586 (terceira lua dos 14 anos da era Tenxō) e lhe solicitou dois navios para conquistar a China e a Coreia<sup>24)</sup>. Em Agosto desse mesmo ano (sexta lua dos 14 anos da era Tenxō) numa carta ao senhor de Tçuxima (対馬) Sô Yoxixighe (宗義調), Fideyoxi exigiu-lhe que o acompanhasse na conquista de Cōrai (高麗, isto é, a Coreia).

Ao estacionar em Xendai (川内), aquando da invasão do reino de Satçuma (薩摩) em 1587 (15 anos da era Tenxō), Yanagava Xighenobu (柳川調信), mensageiro de Sô Yoxixighe, fez chegar a Fideyoxi uma carta em que o senhor de Tçuxima tenta persuadi-lo da injustiça da invasão súbita da Coreia. Para demover Fideyoxi, Sô Yoxixighe oferece-se como mediador diplomático, mas Fideyoxi, depois de receber a carta de Sô Yoxixighe, insistiu que o rei da Coreia se rendesse ao dairi (内裏, isto é, o imperador) do Japão, prometendo a Sô Yoxixighe que o rei da Coreia conservaria o seu feudo peninsular se aceitasse o requerimento do senhor universal do Japão e que, no caso de não aceitá-lo, ele invadiria a Península da Coreia e o rei de Tçuxima poderia aumentar outros feudos naquele reino previstamente conquistado.

Além de exigir a rendição ao rei da Coreia através do clã Sô, Fideyoxi obrigou Conixi Yukinaga (小西行長) e Catô Kiyomasa (加藤清正) a vigiá-lo para saber se Sô Yoxixighe iria transmitir a exigência de Fideyoxi ao rei da Coreia. Sô Yoxixighe enviou um mensageiro à Coreia com notícia da tomada do poder absoluto no Japão por Fideyoxi, aconselhando-o a enviar uma missão que felicitasse Quambacudono pelo sucedido. O senhor de Tçuxima tentou dessa forma dar uma falsa aparência à missão aconselhada por esta ocasião, se esforçando por fingir que ela chegaria à corte de Fideyoxi na qualidade de missão rendida. A missão coreana partiu de Seul na terceira lua dos 18 anos da era Tenxō e chegou a Kiōto a 18 de Agosto de 1590 (19 dias da sétima lua dos 18 anos da era Tenxō) acompanhada de Sô Yoxitoxi (宗義智), um pouco depois de Fideyoxi ter subjugado o clã Fōgiō e ter partido de Odavara para a conquista dos reinos no Nordeste. Aproximadamente três meses após o seu regresso em triunfo a Kiōto a 1 dia da nona lua dos 18 anos da era Tenxō, esta missão foi recebida a 3 de Dezembro de 1590 (7 dias da décima primeira lua) para grande satisfação de Fideyoxi que a acolheu como representante formal do rei coreano e no pressuposto de que este lhe queria prestar tributo. Em resposta ao rei da Coreia, Fideyoxi escreveu-lhe uma carta datada à décima primeira lua dos 18 anos da era Tenxō, exigindo que este o guiasse no caminho para a China aquando da sua projectada invasão. A missão coreana, claro, surpreendida com o conteúdo desta resposta, solicitou em vão que o teor do texto fosse alterado, solicitação essa que seria repetida no caso da resposta ao vice-rei da Índia. Sô Yoxitoxi regressou a Tçuxima à terceira lua do ano seguinte com a missão coreana e ela partiu para a Coreia daí, mas a exigência de Fideyoxi fez com que tanto Sô Yoxitoxi como Conixi Yukinaga caíssem num atoleiro. Estes daimiō tentaram persuadir o rei a apoiar os exércitos de Fideyoxi na travessia da Península da Coreia durante a projectada campanha contra a China. Sô Yoxitoxi visitou em pessoa a corte coreana e se esforçou por persuadi-la a dar aprovação tácita à travessia da Coreia, mas para aquele soberano, que a China tinha como vassalo, a exigência de Fideyoxi era tão violenta e insensata que não lhe mereceu qualquer atenção.

Desconhecendo o progresso das negociações com a Coreia, Fideyoxi deu andamento aos preparativos da invasão da China por via da Coreia. Finalmente em Setembro de 1591 (oitava lua dos 19 anos da era Tenxõ) ele marcou a data de partida dos seus exércitos para 12 de Abril de 1592 (1 dia da terceira lua) do ano seguinte. A 10 de Fevereiro de 1592 (27 dias da décima segunda lua dos 19 anos da era Tenxõ) Fideyoxi cedeu o poder ao seu sobrinho Fidetçugu (秀次), ao qual atribuiu o título honorífico de Quambacu, e a 17 de Fevereiro de 1592 (5 dias da primeira lua dos 20 anos da era Tenxõ) deu ordens para que os capitães partissem para a Coreia com destino à China<sup>25</sup>.

\* \* \*

O domínio de Riûkiû (琉球, isto é, actual Okinawa 沖縄) fez também parte das preocupações de Fideyoxi. Depois da conquista total de Kiûxû, Fideyoxi através do intermediário do clã Ximadzu (島津) exigiu que o rei de Riûkiû se rendesse a si e lhe pagasse o devido tributo. Com este objectivo Ximadzu Yoxifiro (島津義弘) enviou uma carta datada a 2 de Outubro de 1588 (12 dias da oitava lua dos 16 anos da era Tenxõ) pela primeira vez a Xõyei (尚永), rei de Riûkiû. No ano seguinte Fideyoxi fez com que Ximadzu Yoxifisa (島津義久) urgisse mais uma vez com Xõnei (尚寧) para que lhe pagasse o tributo. Xõnei, a 9 de Julho de 1589 (27 dias da quinta lua dos 17 anos da era Tenxõ), decidiu enviar um bonzo budista de nome Tenriûji Tõan (天龍寺桃庵) à corte de Fideyoxi. O bonzo, acompanhado de Ximadzu Yoxifisa, chegou a Vôzaca (大坂) na nona lua do mesmo ano e foi recebido um pouco mais tarde por Fideyoxi no Palácio Iuracutei. Fideyoxi enviou uma carta de resposta datada a 2 de Abril de 1590 (28 dias da segunda lua dos 18 anos da era Tenxõ) ao rei de Riûkiû. Ximadzu Yoxifisa enviou uma carta datada a 19 de Setembro de 1590 (21 dias da oitava lua dos 18 anos da era Tenxõ) a Xõnei, informando-lhe o que Fideyoxi tinha subjugado a região de Quantô (關東) e pedindo-lhe que oferecesse a Fideyoxi músicos para festejar a sua façanha militar. Na carta de resposta datada a 8 de Outubro de 1591 (21 dias da oitava lua dos 19 anos da era Tenxõ) Xõnei mostrou a Ximadzu Yoxifisa a sua intenção de enviar alguns presentes a Fideyoxi que chegariam a Cagoxima (鹿児島) na primavera do ano seguinte<sup>26</sup>.

Fideyoxi, numa missiva enviada pelo comerciante japonês de nome Farada Magoxichirõ (原田孫七郎) e datada a 1 de Novembro de 1591 (15 dias da nona lua dos 19 anos da era Tenxõ), exigiu ao governador das Filipinas a rendição e o pagamento do tributo. Em Maio de 1592 (quarta lua dos 20 anos da era Tenxõ) Farada chegou às Filipinas com as exigências de Fideyoxi. A partir daí as várias missivas e missões trocadas sem sucesso entre o governador e Fideyoxi terminaram com o episódio do galeão S. Felipe e o martírio dos vinte e seis missionários e cristãos em Nagasaki<sup>27</sup>.

Fideyoxi, numa outra carta de 27 de Dezembro de 1593, isto é, 5 dias da décima primeira lua dos 2 anos da era Bunrocu (文祿), dirigida ao reino de Tacasago (高山) que é actual Taiwan (台灣) e enviada pelas mãos de Farada Kiyemon (原田喜右衛門), ameaçou invadir o reino se, à semelhança de Riûkiû e Nanban (南蛮), este não se rendesse ao poder de Fideyoxi e não lhe pagasse o devido tributo<sup>28</sup>. Parece que esta carta ainda existente e de conteúdo muito agressivo acabou por não ser enviada dado que Fideyoxi estava ocupado com os preparativos financeiros para a invasão da Coreia<sup>29</sup>.

## V

A carta do vice-rei da Índia levada por Valignano chegou ao senhor universal do Japão envolvido numa política agressiva e ameaçadora contra as regiões vizinhas. A missiva de D. Duarte de Menezes foi escrita originariamente com o objectivo de agradecer-lhe a “benevolência” e o apoio aos jesuítas e Valignano tentou fazer dela um instrumento de aplacar-lhe a atitude para com o Cristianismo, enfrentando com a sua atitude severa contra a Igreja Católica. Portanto não se pode negar, ao considerar como Fideyoxi atendeu à missão do vice-rei, que a investigação textual da carta de resposta de Fideyoxi é mais importante do que a da missiva meramente cerimoniosa de D. Duarte de Menezes. A sua resposta ao vice-rei tão insolente e agressiva, ao contrário da missiva protocolar de Menezes, viria a destruir as inocentes esperanças dos jesuítas.

A audiência concedida por Fideyoxi a Valignano no Palácio Iuracutei a 3 de Março de 1591 (8 dias da primeira lua bissexta dos 19 anos da era Tenxō) foi pormenorizadamente descrita pelo Pe. Luís Fróis. Segundo este historiador jesuíta, a carta do vice-rei, assim como a sua tradução japonesa, foi levada para o Palácio numa mala e lida na audiência, dela constando também a lista dos presentes oferecidos pelo vice-rei a Fideyoxi.

Em resposta foi preparada uma missiva junto com alguns presentes para D. Duarte de Menezes não sem que antes Fideyoxi oferecesse a cada um dos membros da missão prata e cosode (小袖), pequeno e luxuoso quimono de seda. A Valignano foram oferecidas duzentas barras, ao Pe. Mesquita e ao Pe. Lopes cem barras respectivamente, aos treze tripulantes cinco barras, aos quatro jovens embaixadores e aos sete criados cinco barras respectivamente, e finalmente aos dois irmãos intérpretes trinta barras respectivamente, num total de 580 barras, no valor de 2494 taéis (uma barra de prata equivalia a quatro taéis e três mazes). Os trinta e seis cosode de seda que foram oferecidos aos membros da missão equivaliam a 100 taéis<sup>30</sup>.

Fróis alude também ao ambiente da audiência, dando ênfase sobre o caráter íntimo e familiar em que ocorreu e que transcreve na sua *Historia de Japam*: “[Quambacudono] finalmente em tudo se mostrou naquelle dia tão alegre, tão contente e satisfeito, que se não podia mais dezejar.”<sup>31</sup> E mais adiante: “com estes favores tão grandes e tão inesperados logo se encheo o Miaco e foi correndo a nova por todo Japão que os Padres erão restituídos; [.....]”<sup>32</sup>. É possível que Fróis imaginasse uma recepção mais fria por ser proibida a missão cristã no Japão mas apesar disso Fideyoxi recebeu-a com uma amizade e cordialidade que o surpreendeu. Outros factos, porém, levam-nos a crer que Fideyoxi não viu a missão só com a complacência e amizade a que Fróis alude.

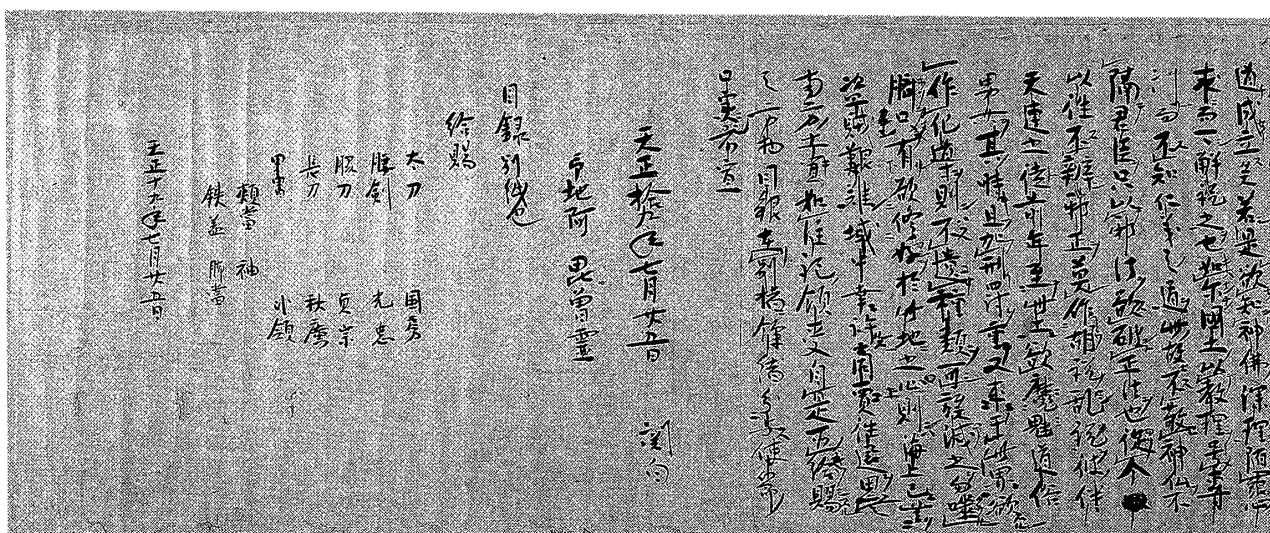
Antes da audiência Fideyoxi fez saber que não desejaria receber a missão se esta tivesse como objectivo procurar apoio para os padres jesuítas por estes terem um comportamento imperdoável<sup>33</sup>. E Fideyoxi após a audiência suspeitou dos verdadeiros objectivos da missão e deixou transparecer essa sua preocupação<sup>34</sup>. De qualquer maneira a carta de resposta de Fideyoxi seria parcialmente alterada e reescrita a pedido dos jesuítas por ser extremamente insolente e arrogante.

Quatro meses e meio após a audiência, Fideyoxi ordenou através do governador de Kiōto Mayeda Gheny (前田玄以) que bonzos budistas, cuja figura principal era Seixō Iōtai (西笑承兌), redigissem a carta de resposta ao vice-rei. O Diário *Rocuwon Nichirocu* (『鹿苑日録』) a 19 de Julho de 1591 (29 dias da quinta lua dos 19 anos da era Tenxō) diz:

Na noite passada recebi uma carta de Gheny. Vou imediatamente à residência dele junto com Seixô Iôtai de palanquim. Aqueles que se reuniram aí para discutir o texto da carta de resposta são: o sacerdote superior do Templo Xōgoyn (聖護院) de nome Dōchō (道澄), Vdaijin (右大臣) Kicutei Farusuye (菊亭晴季), Seixô Iôtai, o sacerdote da seita Rinzai (臨濟宗) de nome Ykiō Yeitetçu (惟杏永哲), eu, ou seja, o autor do Diário Yūxetçu Zuifō (有節瑞保) e o poeta de renga (連歌) Satomura Iōfa (里村紹巴). Após a pormenorizada discussão acerca da resposta ao vice-rei de Nanban, Seixô Iôtai escreveu o esboço do texto.<sup>35)</sup>

Quatro dias mais tarde e ainda de acordo com o Diário *Rocuvon Nichirocu* datado a 23 de Julho de 1591 (3 dias da sexta lua dos 19 anos da era Tenxō), as mencionadas pessoas, junto com mais um membro de redacção chamado Satomura Xōxitçu (里村昌叱), foram convocadas por Fideyoxi. O Diário da mesma data diz:

Recebendo uma mensagem de Mayeda Gheny, informo-me de que sou convocado por Quambacudono e vou à residência de Gheny de palanquim. Aí se reuniram o sacerdote superior do Templo Xōgoyn, Kicutei Vdaijin (菊亭右大臣), Seixô Iôtai, Ykiō Yeitetçu, Rincōsai (臨江齋, isto é, outro nome de Satomura Iōfa), o poeta de renga Satomura Xōxitçu e eu. Após conversarmos familiarmente apreciando o chá, somos convocados por Quambacudono e discutimos o texto da carta de resposta ao vice-rei de Nanban (南蛮). Quambacudono se digna oferecer um doce japonês chamado vnmon (雲門) aos respectivos presentes. Confirmamos seguramente que os bateren (伴天連, isto é, os padres) de Nanban pretendem expelir as nossas leis justas por meio das suas perversas. A partir de agora, se intentarem de novo salvar o nosso povo através das leis falsas nesta Monarquia do Japão, serão castigados e perseguidos até à morte sem remissão nenhuma, e que, por outro lado, a vinda dos comerciantes portugueses seria permitida.<sup>36)</sup>



Rascunho da carta de resposta de Toyotomi Fideyoxi ao Vice-Rei da Índia D. Duarte de Menezes (Biblioteca Central de Tenri, Universidade de Tenri)

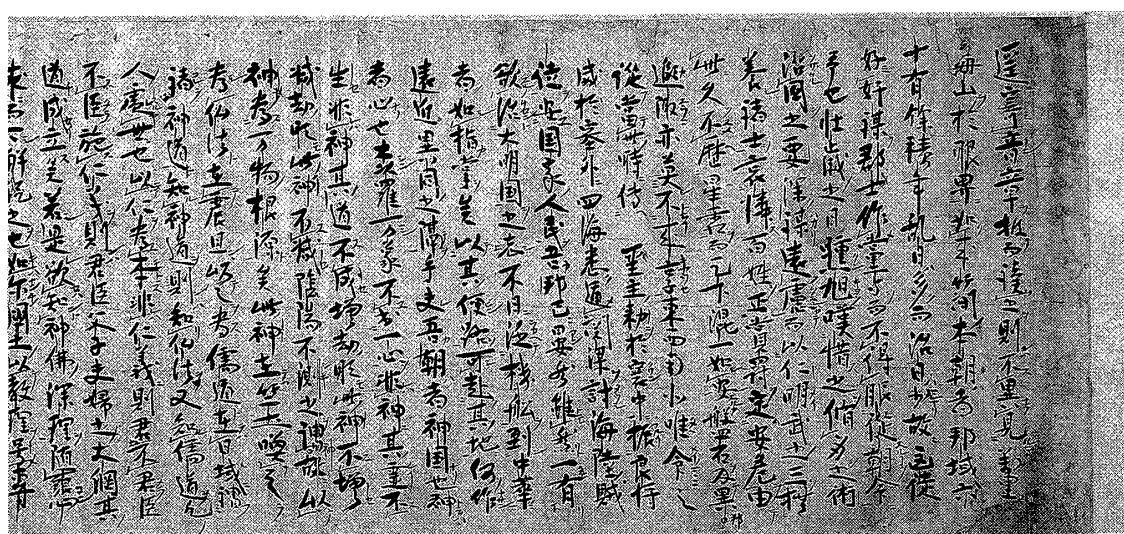
ポルトガル国印度副王宛豊臣秀吉返書案文 (天理大学附属天理図書館蔵)



Nessa data, ou seja, a 23 de Julho de 1591 (3 dias da sexta lua dos 19 anos da era Tenxō), participou também na revisão da carta um poeta de renga de nome Satomura Xōxitçu (里村昌叱), não se sabendo exactamente se o esboço anteriormente preparado teria sido aprovado ou parcialmente reescrito. Pode-se dizer, porém, que a carta de resposta estava praticamente pronta aos 3 dias da sexta lua. O rascunho do texto da carta de Fideyoxi ao vice-rei, datado a 12 de Setembro de 1591 (25 dias da sétima lua dos 19 anos da era Tenxō) encontra-se hoje conservado na Biblioteca Central de Tenri, em Nara.

O texto em chinês dividido em três parágrafos pelo citador, traduzimo-lo e transcrevemo-lo integralmente :

1 Vós enviáveis-me de terras muito afastadas uma carta, a qual, abrindo-a e lendo-a me parecia ver com os meus olhos a distância de milhares de léguas que há por mar e por montanhas. Como nela dizia, esta monarquia do Japão compreende mais de sessenta reinos e senhorios, nos quais pelo decurso do tempo passado houve grandes perturbações e guerras e pouca quietação e paz, pelo que os malfeitores, maquinando traições ardilosas, se ajuntaram em grande número não querendo obedecer ao mando do Imperador. Pelo qual eu na flor da minha idade sempre me entristecia e fui considerando o modo maravilhoso e importante para disciplinar e governar bem estes reinos. Assim, por meio de três virtudes, isto é, amorosa e piedosa afabilidade em tratar os homens e os lavradores, discreta prudência em julgar as coisas, e o esforço e ânimo, restituí paz e tranqüilidade a esta monarquia e em breves anos se uniu toda a Tenca (天下) e ficou tão segura como uma pedra muito grande que não se pode mover ; e assim até dos reinos estranhos e lugares remotos todos vieram prestar a obediência e todas as quatro partes obedecem à minha vontade de acordo com a ordem do meu prudente senhor. Exercitei e manifestei o poder de bom capitão, de tal maneira que todas as quatro partes estão sujeitas, matando os maus ladrões no mar e em terra e fazendo viver em paz o meu reino e o meu povo de modo que a nossa monarquia já goza



de uma perfeita tranqüilidade. Apesar disso tenho a determinação de governar a grande Dinastia Ming e em breves dias navegarei para lá, não tendo nenhuma dificuldade em subjugar-la à minha vontade. Assim chegando a vossos reinos, haverá comodidade e haverá maior facilidade em nos comunicarmos.

2 A nossa monarquia do Japão é o reino de Camis. Os camis são iguais aos Xins (心), isto é, a divindade que é o princípio de todas as coisas, a substância e o verdadeiro ser de todas elas; e assim acreditamos que o Xin é a origem de todas as coisas neste mundo, que se chama Buppô (仏法) no Tengicu (天竺), Iudô (儒道) na China e Xintô (神道) no Japão. Conhecendo o Xintô, conhecemos o Buppô e o Iudô também. Para viver neste mundo julgamos indispensável respeitar a virtude. Não obedecendo à virtude o senhor não pode ser o senhor nem o vassalo pode ser o vassalo. Seguindo o caminho da virtude poderemos estabelecer as boas e fundamentais relações entre o senhor e o vassalo, entre o pai e o filho, e entre o marido e a esposa. Se vós quiserdes conhecer profundamente a filosofia de Fotoques e Camis, eu explicá-la-ei de acordo com a vossa solicitação.

3 Vós concentrais-vos na missionação cristã. Vós não conheceis a via da virtude pelo que não respeitais Camis nem Fotoques e não distinguis entre o senhor e o vassalo, desejando apenas destruir as justas leis e substituí-las por uma lei falsa. Compreendais a diferença entre o mal e o bem e não divulgueis as leis perversas nem as opiniões tolas a partir de agora. Aqueles padres cristãos, tendo chegado a nossas terras, têm o desejo de seduzir homens e mulheres tanto no mundo religioso como no mundo secular. Vendo isto, eu decidi castigá-los imediatamente se regressarem outra vez a nossas terras e quiserem seduzir de modo feiticeiro o nosso povo e aniquilá-los-ei sem nenhuma remissão. Não vos arrependei do péssimo resultado. Se quiserdes estabelecer boas relações conosco, eu permitirei a livre vinda dos vossos mercadores dado não haver perigo de ladrões no nosso mar. Tenho pensado nisto.

Já recebi os vossos presentes como indicados na lista separada e indico-vos os meus na lista anexa. Quanto ao mais me remeto ao embaixador que o diga, e por isso não sou mais largo. Cordialmente.

Aos 25 dias da sétima lua dos 19 anos da era Tenxô

Quambacu

Vice-Rei da Índia

Lista dos presentes ao Vice-Rei da Índia

Ofereço-vos os seguintes:

Tachi (太刀 espada comprida) da autoria de Cunifusa (国房)

Yôken (腰剣 espada de cinta) da autoria de Mitçutada (光忠)<sup>37)</sup>

Vakigatana (脇刀 espada curta) da autoria de Sadamune (貞宗)

Nagagatana (長刀 espada comprida) da autoria de Akifiro (秋広)

Catchû (甲冑 armadura) duas peças<sup>38)</sup>

Fôate (頬当 protector do rosto)

Sode (袖 colete de seda)

Tetçugai (鉄蓋 capacete de ferro)

Axiate (脚当 protector das pernas)

Aos 25 dias da sétima lua dos 19 anos da era Tenxō<sup>39)</sup>

\* \* \*

Resumindo de acordo com o seu conteúdo :

- 1 Fideyoxi refere-se à unificação do país e à vontade de conquistar a China (Dinastia Ming). Numa palavra orgulha-se do seu poder.
- 2 Esclarece que o Japão é o país de Camis e que as leis justas são apenas o Confucionismo, o Budismo e o Xintoísmo.
- 3 Fideyoxi reconhece o Cristianismo como prejudicial às leis justas e proíbe a missão católica usando palavras violentas ao mesmo tempo que autoriza a vinda da nau do trato.

O trecho já citado do Diário *Rocuwon Nichirocu* (『鹿苑日録』) datado aos 3 dias da sexta lua, nos informando o conteúdo do rascunho da carta, diz o seguinte: “os bateren de Nanban pretendem expelir as nossas leis justas por meio das suas perversas. A partir de agora, se intentarem de novo salvar o nosso povo através das leis falsas nesta Monarquia do Japão, serão castigados e perseguidos até à morte sem remissão nenhuma, e, por outro lado, a vinda dos comerciantes portugueses será permitida.” Esta descrição representa exactamente o teor do terceiro parágrafo do referido rascunho e é evidente que o autor do Diário queria dar a maior ênfase sobre o intento de Fideyoxi tanto de proibir rigorosamente a missão católica como de permitir a vinda dos comerciantes portugueses. Os princípios manifestados nos segundo e terceiro parágrafos do texto do rascunho são idênticos aos do édito anti-cristão decretado aos 19 dias da sexta lua dos 15 anos da era Tenxō. Quer dizer: Fideyoxi era categórico e consistente nas suas decisões que diziam respeito ao Cristianismo e ao trato.

O texto oficial idêntico ao do rascunho da carta de resposta, conservado hoje na Biblioteca Central de Tenri, não foi enviado ao vice-rei, pois os jesuítas assim que dele tiveram conhecimento recusaram aceitar tal carta devido ao seu conteúdo agressivo e ameaçador, fazendo esforços para que fosse alterado. Era precisamente o terceiro parágrafo que os jesuítas consideravam mais polémico e problemático. Cito aqui a carta de Valignano dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus, de Nagasaki, a 6 de Outubro de 1591 :

[.....] Assi ategora que são çinco de Outubro não tem ainda Quambacundono dado esta reposta, posto que ia temos novas que tem feyto conçertar algumas cousas pera mandar de presente ao Visorey, e que também tem feyto escrever a reposta em que diz que elles tem aquy leis boas, e que por os Padres virem a pregar aquí leis contrarias destruidoras dos Camis, e Fotoques, elle os deitara de Japão, e não queria em nenhum modo que estivessem aquí, e se algum delles ficasse, ou tornasse aqui a pregar esta ley, os avia de mandar matar sem ficar memória delles, e que o Visorey ouvesse assy por bem [.....]<sup>40)</sup>.

Ao escrever esta carta, Valignano já tinha sido informado pelos jesuítas em Kiōto pelo menos do teor do inquietante parágrafo e a ele se refere. Naturalmente seria difícil para os missionários

jesuítas aceitarem a carta com tal teor, razão porque moveram esforços para o alterarem. A carta, afinal de contas, viria a ser escrita de novo graças à intervenção do irmão João Rodrigues e aos bons ofícios do bondoso governador de Kiōto Mayeda Gheny. Essas negociações são minuciosamente descritas por Fróis que nos diz : “posto que houve muito trabalho com os bonzos, que a escreverão, para lhe fazer mudar, mas finalmente se mudou”. Os bonzos neste trecho, claro, são Seixō Iōtai e os outros que com ele redigiram o rascunho da resposta, sendo evidente e natural que estes resistiram vigorosamente à alteração do texto<sup>41)</sup>.

## VI

É extraordinariamente invulgar e excepcional que Fideyoxi tenha aceite alterar o texto da carta anteriormente feita a rogo dos jesuítas, cujas actividades tinham sido severamente proibidas. É naturalíssimo que Iōtai e outros redactores resistissem à sua alteração. Aqui se deve apontar que teve lugar um incidente complicado e Fideyoxi foi obrigado a reconhecer o poder e a influência dos missionários jesuítas na esfera comercial. Disso é exemplo a solução da projectada compra monopolizada do ouro carregado na nau do trato vinda a Nagasaki no verão de 1591.

A 19 de Agosto de 1591 (1 dia da sétima lua dos 19 anos da era Tenxō) a nau capitaneada por Roque de Melo Pereira chegou a Nagasaki. A mando de Fideyoxi, Nabexima Navoxighe (鍋島直茂) e Mōri Yoxinari (毛利吉成), acompanhados de seus exércitos, vieram a Nagasaki e tentaram comprar a preço baixo a totalidade do ouro transportado na nau. Os portugueses insistiram em negociar por intermédio dos jesuítas como era de costume, mas Mōri Yoxinari recusou a sua interferência, razão pela qual o capitão-mor enviou a 2 de Setembro de 1591, isto é, aos 15 dias da sétima lua dos 19 anos da era Tenxō, um protesto a Fideyoxi. Nessa carta o capitão-mor insurgia-se contra os regedores japoneses que injustamente tentaram monopolizar o comércio contra as disposições do xuinjō (朱印状, isto é, a carta patente) de Fideyoxi que garantiam a liberdade do trato. O capitão-mor testemunhava que em quarenta anos da história do comércio luso-japonês nunca tinham sido experimentadas tais dificuldades e pedia a Fideyoxi que fizesse valer a lei<sup>42)</sup>.

Juntamente com a carta, os mercadores entregaram-lhe uma nota verbal na qual enumeraram as atitudes injustas tomadas pelos regedores japoneses e que terminava com as seguintes palavras : “No ano passado de 1590 o vice-rei da Índia enviou a Vossa Senhoria uma missiva para promover o intercâmbio luso-japonês e muito lhe agradecíamos que através da carta patente xuinjō autorizasse as naus portuguesas a fazer o trato sem quaisquer restrições<sup>43)</sup>”. A missiva a que o texto alude é a carta do vice-rei trazida de Goa ao Japão e pode-se afirmar que devido aos entraves colocados na compra do ouro, cuja injustiça chegou a reconhecer, Fideyoxi foi coagido a alterar o conteúdo da carta de resposta tornando-o menos agressivo e insolente.

Ao receber a dita reclamação dos comerciantes portugueses, Fideyoxi encolarizou-se com a ineficácia dos dois regedores e entregou ao capitão-mor a carta patente datada a 26 de Setembro de 1591 (9 dias da oitava lua dos 19 anos da era Tenxō) que versava :

Estou informado que os meus regedores cometeram algumas descortesias contra vós que vos hão causado grande incômodo após a chegada a Nagasaki. Recebi a vossa carta onde me relata tal facto e pretendo castigar os responsáveis por este contratempo. Vós podereis comerciar aqui

tranqüilamente quaisquer mercadorias. Digo mais: vós podereis fazer qualquer reclamação contra todas as possíveis contrariedades, mesmo as mais pequenas. O que agora vos confirmo ser-vos-á igualmente transmitido por Curoda Yoxitaca (黒田孝高) e Natçuca Masaiye (長束正家).

9 dias da oitava lua

Goxuin (御朱印)

Ao capitão-mor do Curofuno (黒船 navio preto)<sup>44)</sup>

Logo após a redacção do esboço da carta de resposta ao vice-rei, a confrontação gerada em torno da compra exclusiva do ouro carregado na nau do trato provocou uma reacção dos portugueses que obrigaria Fideyoxi a expedir a carta patente favorável a eles. Na carta então lavrada Fideyoxi prometeu castigar os dois regedores que atentaram injustamente contra os interesses dos portugueses e mandou que denunciasses quaisquer maus comportamentos que se viessem a verificar. Fideyoxi, que normalmente assumia uma atitude anti-cristã, prestou a mais meticulosa atenção ao protesto do capitão-mor por forma a preservar o comércio luso-japonês. O facto de os portugueses terem vencido o dito processo com os regedores, quando Fideyoxi estava a preparar a alteração da carta de resposta, colocou, segundo creio, os jesuítas numa posição relativamente vantajosa.

Em resumo: os poderosos regedores tentaram adquirir o ouro em exclusivo e em condições desfavoráveis para os mercadores portugueses gerando uma reacção que por muito justa teve de ser acatada. Neste caso, os portugueses fizeram ver a Fideyoxi que os regedores, ao tentarem negociar directamente com os comerciantes, ignorando a necessária e acostumada intervenção dos jesuítas, estavam a contrariar uma prática aceite até ali por largo período. Ao permitir tacitamente, reconhecendo a influência dos jesuítas na esfera comercial, que eles permanecessem no Japão, Fideyoxi determinou que “dez de seos companheiros (da embaixada)”<sup>45)</sup> ficassem “como refens”<sup>46)</sup> por ter suspeitado da autenticidade desta embaixada ou “como medianeros del comercio” ou “por arrefens que se no cortasse el comercio”<sup>47)</sup> ou “como mercadores”<sup>48)</sup>. Qualquer que fosse a sua qualidade, é de notar que a presença dos padres jesuítas no Japão foi afinal de contas autorizada e permitida.

\* \* \*

Valerá a pena analisar a resposta de Fideyoxi ao vice-rei após a alteração feita como resultado das pressões exercidas pelos jesuítas. O texto original não existe ou não se conhece, restando apenas a tradução castelhana que consta das Cartas Ânua da Companhia de Jesus em 1592<sup>49)</sup> e a tradução portuguesa publicada na *Historia de Japam* de Luís Fróis<sup>50)</sup>. Ambas as traduções têm quase o mesmo conteúdo. Divido-as respectivamente em três parágrafos.

Versão castelhana :

1 Reçebi la carta que Vuestra Señoría me enbió de tierras muy apartadas, la qual, en abriendo y leyendo, me paresía ver la distancia de millares de leguas que ay por mar y por tierra. Y como enlla [sic.] dezía, este reino de Japón comprehende más de 60 estados y señorios, en los quales por el discurso del tiempo pasado uvo [sic.] grandes perturbaciones y guerras, y poca quietud y paz, por que los malos y perversos, maquinando traiciones, se juntaron en grande numero, no

queriendo obedecer a los mandados del rey. Por lo qual yo en la flor de mi hedad, me entristesía y aflixía y de lexos fue considerando el modo maravilloso e jnportante que avría pera sujetar las jentes y gobernar bien los Reinos fundando me en tres virtudes, conviene a saber en amorosa afabilidad en tratar con los hombres, en discreta prudencia pera jusgar las cosas, y en esfuerço y valor de ánimo, con los quales sujeté y gobierno agora todos estos Reinos, teniendo conpaçión de los labradores que trabaxan en cultivar la tierra, apremiando y castigando rectamente a los malos. Y con esto restitui la paz y tranquilidad destos reinos, y en breves años se unió la monarchia de Japón y quedó tan fuerte y quieta como una piedra muy grande que no se puede mover, y así hasta de los reinos estraños y lugares remotos vinieron a dar la obediencia. Por lo qual agora por todas las 4 partes destos reinos es el rey mi prudente señor, obedecido, y por su horden exercité y manifesté el poder de buen capitán, de manera que todos estos Reinos le estam sujetos, matando yo los malos y perversos y quitando los ladrones por mar y por tierra, con que hago bibir en paz los lugares, familias y pueblos de todos estos reinos, y así gozan agora de una grande tranquilidad. Y en todo caso tengo determinado de pasar a tomar el reino de la China, y en breves días navegaré pera allá, no teniendo duda de los sujetar a mi boluntad y así llegando me más pera esos reinos avrá comodidad pera más y más nos comunicar.

2 Quanto a los Padres, este reino de Japón es reino de Camis, los quales entendemos que son una misma cosa con el Xín que es principio de todas las cosas, el qual Xín es la sustancia y ser verdadero de todas ellas, y así todas las cosas son una misma cosa con este Xín y en el se rresuelben. El qual se llama en la China Jutto y en el Tenxicu Buppo. Y en la observancia de las leyes destos Camis, consiste toda la poliçia y gobierno de Japón, la qual poliçia no se guardando no se conoçe diferencia entre los señores y vassalos, y al contrario guardandose, se perficiona la unión que deve aver entre ellos y entre los padres y hijos, maridos con mugeres, por lo qual así el gobierno ynterior, como exterior de los hombres y de los reinos, está puesto en la observancia desta unión y pulicia [sic. policia?].

3 Y los Padres vinieron estos años atrás a estos Reynos a enseñar otra ley para salvar los hombres, mas, por quanto nosotros estamos ya asentados en estas leyes de los Camis, no tenemos pera que desear otras leyes, por que mudando las gentes varias opiniones y leyes, es cosa perjudicial pera el reino, y por esta causa tengo mandado que los Padres se vaian de Japón, y prohibido que no se promulgue esta ley, y que ninguna persona venga de aquí adelante a predicar leyes nuevas a esta tierra. Con todo eso, deseo que tengamos comunicaci3n, la qual queriendo allá tenerla, está este reino franco y libre de ladrones por mar y por tierra, y a los que vinieren con sus mercaderías, doy liçencia pera que puedan venir y vender todo libremente sin ninguno los ynpedir. Y a Vuestra Señoría ruego que lo tenga así por bien.

Recebi las cosas que me enbió de presente de esas partes del sur, todas así como la suya me dezía, y enbio otras destos reinos con un memorial en otro papel apartado, de las pieças y nombres de quien las hizo. Y lo demás me rremito al enbaxador que lo diga, y por eso no soy más largo. Escrita a los 20 años de la hera Tenxó, a los 25 días de la septima luna. Al fin está su sello y firma.

Versão portuguesa :

1 Recebi a carta que Vossa Senhoria me mandou de terras mui afastadas, a qual, abrindo e lendo-a, me parecia de ver a distancia de milhares de legoas que há por mar e por terra. E, como nela dizia, este reyno de Japão comprehende mais de sessenta estados e senhorios, nos quaes pelo discurso do tempo passado houve grandes perturbações e guerras, e pouca quietação e paz, porque os maos e perverso[s], maquinando traições, se ajuntarão em grande numero, não querendo obedecer aos mandados d'El Rey. Pelo qual eu na flor de minha idade de continuo me entristecia e affligia, e de longe fui considerando o modo maravilhoso e importante para sojeitar as gentes e governar bem os reynos, fundando-me em três virtudes, scilicet, amorosa affabilidade em tratar com os homens, discreta prudencia em julgar as couzas, e esforço e valor de animo; com as quaes sojeitei e governo todos estes reynos, tendo compaixão dos lavradores que trabalham em cultivar a terra, e favorecendo-os, e opprimindo e castigando rectamente os homens. E com isto restitui a paz e tranquillidade a estes reynos, e em breves annos se unio a Monarquia de Japão e ficou tão forte e quieta como huma pedra muy grande que se não pode abalar; e assim athé dos reynos estranhos e lugares remotos vierão conhecer sojeição e dar obediencia. Pelo qual agora por todas as quatro partes destes reynos hé El-Rey, meu prudente senhor, obedecido, e por sua ordem exercitei e manifestei o poder de bom capitão, de maneira que todos estes estados lhe estão sojeitos, matando eu os maos e perversos; e tirando os ladrões por mar e por terra, faço viver em paz os lugares, familias e povos de todos estes reynos, de modo que gozão agora de huma summa tranquillidade. E em todo cazo tenho determinado que hei-de passar a tomar o reyno da China, e em breves dias navegarei para lá, nam tendo duvida de o sojeitar à minha vontade. E assim chegando-me mais para esses reynos haverá commodidade para mais e mais nos comunicarmos.

2 Quanto aos Padres, este reyno de Japão hé reyno dos camis, os quaes temos que são huma mesma couza com o Xin que hé principio de todas as couzas, o qual Xin hé a substancia e verdadeiro ser de todas ellas; e assim todas as couzas são huma mesma couza com este Xin e nelle se rezolvem. O qual se chama na China Ju tô e no Tengicu Buppó. E na observancia das leys destes camis, consiste toda a policia e governo de Japão, a qual policia nam se guardando não se conhece a diferença entre os senhores e vassallos, e pelo contrario guardando-se, se perfeioa a união que deve de haver entre elles, e entre os pays e filhos e maridos e mulheres; pelo qual assim o governo interior, como exterior dos homens e dos reynos, está posto na observação desta união e policia.

3 E os Padres vierão estes annos atraz a estes reynos a ensinar outra ley para salvar os homens, mas, porquanto nós outros estamos assentados nestas leys dos camis, não temos para que desejar de novo outras leys: porque mudando a gente varias opiniões e leys, hé couza prejudicial para o reyno, e por esta cauza tenho mandado que os Padres se vão de Japão, e prohibido que se não promulgasse esta ley, e que nenhuma pessoa venha daqui adiante a pregar leys novas a esta terra. Com tudo isto desejo que tenhamos communicação, a qual de lá querendo, está este reino franco e limpo de ladrões por mar e por terra; e aos que vierem com suas mercadorias, dou licença que possão vir e vender tudo livremente sem ninguem os impedir, e V. Senhoria assim o haja por bem e faça disto entendimento.

Recebi as couzas que me mandou de presente dessas partes do Sul, todas assim como na sua

me dizia, com as quaes folguei ; e mando outras destes reynos com hum rol em outro papel apartado, com as peças e nomes de quem as fez. E no mais me remeto ao embaixador que o diga, e por isso não sou mais largo.

Escrita aos 20 anos da hera Tenxó, aos 25 dias da setima lua.

E no fim está a chapa de seo sello.<sup>51)</sup>

Isto é a tradução do texto da carta de resposta já alterado a pedido dos jesuítas. Segundo a carta de Valignano dirigida à sede da Companhia de Jesus, de Nagasaki, a 9 de Outubro de 1591, ele foi informado da mudança de atitude de Fideyoxi em favor dos jesuítas infalivelmente através das duas cartas enviadas pelo Pe. Organtino e pelo irmão João Rodrigues em Kiōto, ambas datadas a 23 de Setembro. Valignano, depois de se referir ao facto de que o governador de Kiōto Mayeda Gheny é privado com Fideyoxi e é sempre favorável às coisas da Igreja Católica, diz : “[Mayeda Gheny] tomou tãobém a seu cargo de fazer mudar a carta que Quambacundono tinha escrito ao Visorey, fazendo vir o treslado della diante do irmão [João Rodrigues], e examinando com elle o que parecia que se avia de tirar, [.....]<sup>52)</sup>”.

O rascunho da carta de resposta ainda não alterado é datado a 12 de Setembro de 1591 (25 dias da sétima lua dos 19 anos da era Tenxō), por conseguinte, Valignano tomou conhecimento da realização das pretendidas alterações, sem dúvida nenhuma, através das ditas duas cartas datadas a 23 de Setembro. Este facto não só evidencia que o rascunho foi imediatamente entregue aos jesuítas em Kiōto e que estes extremamente perplexos com a insolência e agressividade do texto, especialmente com as palavras que criticam violentamente a missão cristã, solicitaram através de Mayeda Gheny que Fideyoxi alterasse o texto, mas também esclarece que essa alteração foi feita de acordo com a vontade dos jesuítas. Através da citada carta não nos é dado conhecer quando é que o texto final ficou completo, mas apenas que mesmo depois do dia 23 de Setembro ainda não estaria finalizado. Veja-se a carta de Valignano dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus, de Nagasaki, a 15 de Fevereiro de 1592.

[Quambacudono] fue de tal manera movido por Dios por medio de un señor gentil (governador del Miacó y su privado mui grande que tomó a favorecer nuestras cosas) que no solo mudó una Carta que tenía ya scrita y sellada pera el Virrej, en que dezía que desterrara los Padres del Japón, por que predicavan en el una ley mala y del Diablo, y destruyan los Camis y Fotoquees y que sin duda si algunos viniessen aquí los mataría. Escriviendole otra Carta mui bien enseñada y cortés, más aun ordenó que quedassen en la Iglesia y casa de Nangaçaqi, diez de los Padres mis compañeros para que fuessen como medianeros del comerçio que desseava de tener con el Vi Rey, con tal que no tratassen más de hazer converçión ny predicassen a los Japones nuestra ley.<sup>53)</sup>

Esta carta evidencia que Valignano já foi informado do texto da carta de resposta parcialmente corrigido (isto é, o texto conhecido através das traduções castelhana e portuguesa) quando ele a escrevia em Nagasaki. Sendo a carta de resposta datada a 1 de Setembro de 1592 (25 dias da sétima lua dos 20 anos da era Tenxō), é evidente que esta data é bastante posterior àquela em que se fixou o texto final. Sendo igual a data (tanto o dia como o mês) da carta antes de alterada, o redactor,



segundo penso, corrigiu apenas o ano (dos 19 anos aos 20 anos da era Tenxō).

No que diz respeito ao conteúdo do texto revisto, através da comparação com o citado rascunho escrito em chinês, é possível confirmar quais partes foram alteradas. O primeiro e o segundo parágrafos não sofrem nenhuma modificação no conteúdo essencial e umas pequenas diferenças entre eles resultam irresistivelmente da tradução. Quanto ao terceiro parágrafo, porém, as diferenças são substanciais. Este parágrafo alude à proibição da missionação católica e à autorização do comércio luso-japonês em Nagasaki. Não havendo alteração nenhuma sobre a liberdade do trato, pode-se dizer que a única e importante diferença entre os dois documentos, ou seja, entre o rascunho em chinês e o texto definitivo que conhecemos através das traduções castelhana e portuguesa, reside apenas na escolha das palavras. O texto final é mais moderado ainda que ambos os textos, claro, sejam unânimes em proibir a missionação cristã. Os jesuítas, conhecendo bem a impossibilidade de Fideyoxi abolir o édito anti-cristão, satisfizeram-se com a carta de resposta definitiva “mui bien enseñada y cortés”.

## VII

Como já referi, a política diplomática de Fideyoxi para com Portugal iniciada com a missão do vice-rei da Índia deve ser compreendida no âmbito das relações desenvolvidas entre o Japão e os seus vizinhos da Coreia, Riûkiû (Okinawa), Filipinas e Tacasago (Taiwan). No entanto, comparada com as outras, a carta em questão distingue-se não só por ser a resposta passiva mas sobretudo por não fazer quaisquer exigências ou referências à rendição do vice-rei, ou seja, ao pagamento do tributo da parte do representante português de todo o Estado da Índia Oriental<sup>54</sup>).

Correlacionam-se um ao outro, segundo creio, estes dois pontos. Fideyoxi enviou a carta “passiva” ao vice-rei, ao contrário das outras cartas escritas de modo activo. Como recebeu a carta do vice-rei que lhe pedia para favorecer os missionários católicos, Fideyoxi, na carta de resposta, manifestou-lhe as suas opiniões acerca do assunto. Considerando a agressividade de Fideyoxi para com as outras potências, não seria de estranhar que a mesma resposta contivesse referências à rendição do vice-rei, dado que, no primeiro rascunho em especial, ele ufana-se do seu poder, exalta o Japão e as justas religiões que professa e proíbe o Cristianismo com palavras violentas. O facto de que Fideyoxi não se refere à exigência do pagamento do tributo só na carta ao vice-rei, segundo me parece, exprimiria a sua consideração meticulosa para com a presença lusa, especialmente na esfera comercial, no Japão.

Durante a invasão da Coreia, numa mensagem agitadora enviada aos daimiō em campanha e datada em 1592 (3 dias da sexta lua dos 20 anos da era Tenxō), Fideyoxi diz: “O número dos nossos soldados atinge duzentos mil ou trezentos mil efectivos pelo que dominar a Dinastia Ming, fraca como uma virgem, é tão fácil como quebrar ovos contra as montanhas. A conquista de Tengicu e de Nanban é a mesma coisa!”<sup>55</sup>) Não se entende exactamente o que significa a palavra “Nanban”, mas associada à Índia (Tengicu), é certo que não seria referência às Filipinas. Suposto que a alusão à palavra “Nanban” se identificaria com Goa, Fideyoxi, como se supõe, não exprimiu a vontade de conquistar os domínios do vice-rei mas apenas dar ânimo aos seus exércitos e com segurança se pode afirmar que era a vontade consistente de Fideyoxi proibir a missionação cristã e promover o trato luso-japonês.

Como já mencionei, Valignano pretendeu aproveitar a missão enviada pelo vice-rei D. Duarte de Menezes para fazer dela um instrumento diplomático a favor da missão católica, tentando, se possível, fazer abolir o édito anti-cristão. Por essa altura Fideyoxi, após a tentativa de comprar exclusivamente o ouro carregado na nau portuguesa, foi forçado a aceitar a reclamação dos comerciantes portugueses contra os seus agentes e a favor da liberdade do trato. Pode-se afirmar que este episódio contribuiu grandemente para a alteração da atitude de Fideyoxi para com os jesuítas, cuja influência sobre a esfera comercial ele chegou a reconhecer afinal de contas. A impossibilidade de se cumprirem os dois pontos essenciais do édito anti-cristão, expulsando os jesuítas e conservando o trato, permitiu que os jesuítas, na posse da carta de resposta mais moderada, conseguissem, ainda que com algumas restrições, a autorização tácita para permanecerem no Japão. Conclui-se, portanto, que o envio desta missão contribuiu razoavelmente para a melhoria da situação eclesiástica no Japão.

### 日本語原文

#### インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスが豊臣秀吉に送った親書 ——日本側からの考察——

高瀬 弘一郎

© Fundação Cidade de Lisboa

一六・一七世紀日葡通交の歴史は、天文十一年（1542年）に三人のポルトガル人が種子島に漂着したことに始まり、その後一世紀に及ぶ。小論の主題となる1588年インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスの豊臣秀吉宛て書翰は、この歴史の中でいかなる意義を持つのであろうか。日葡通交と言っても、ポルトガル本国と日本とが直接交渉を持ったことはあまりなく、もっぱらマカオからポルトガル船が渡来して貿易をしたり、ポルトガル人の宣教師がカトリック布教を展開したものである。そこにおいて前面に立ったのは、ポルトガル船のカピタン・モールであり、貿易商人であり、カトリックの宣教師たちである。カピタン・モールは単なる船長とは違い、陸上のポルトガル人に対してもその権限が及んだが、しかしそれはあくまで対ポルトガル人という限界を超えるものではない。というわけで日葡通交と言っても、肝心のポルトガル側の主権者の顔があまり見えない。

厳密な意味で日葡双方の主権者が直接交渉を持った事例としては、寛永「鎖国」後の1647年に、貿易再開を願うためにポルトガル国王ドン・ジョアン四世が、日本〈国王〉（〈皇帝〉とも呼んだ）の許に派遣した、使節ゴンサロ・シケイラ・デ・ソーザの渡来がある<sup>1)</sup>。日葡通交の断絶後になって初めて、ポルトガルの国王が日本〈国王〉たる将軍の許に直接使節を派遣してきたことは、上に述べた日葡通交の性格をよく物語る出来事と言ってよい。

戦国時代ポルトガル国王が、西国の諸大名に親書をよこしたことはあった。たとえばポルトガル国王ドン・セバ스티アンは、1558年と1562年に大友宗麟に宛て親書を送った<sup>2)</sup>、同国王は1565年には大村純忠宛てに親書を認めた<sup>3)</sup>。諸大名の方からポルトガル国王に、書翰を送ったこともあった。たとえば有馬晴信は1582年天正少年使節に託して、ポルトガル国王に書翰を送った<sup>4)</sup>。同じく大村純忠も同年、ポルトガル国王に書翰を送った<sup>5)</sup>。（ポルトガル国王ではなくてインド副王に宛て、島津貴久が書

き送った永禄四年すなわち1561年の書翰も伝存している<sup>6)</sup>。) 上記のポルトガル国王と日本の戦国大名との間の交渉は、両国の主権者間の交渉とは言えない。日本とポルトガルの両国の主権者同士または、主権者に準ずる者の中で直接に交渉が持たれた事例はきわめて少なく、インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスが秀吉に親書を送ってきたのは、そのごく稀な事例の一つであったことをまず認識する必要がある。

\* \* \*

上に述べたポルトガル国王・インド副王と、わが国の主権者・戦国大名との間で取り交わされた書翰について、いま少し記す。それらの書翰では、何が主題となったのであろうか。まずポルトガル国王ドン・セバ스티アンの、大友宗麟宛て1558年の親書は、イエズス会宣教師に対して与えられた恩恵に感謝を表明し、今後も彼らに対する援助厚遇を要請する趣旨である。同国王の同じ大友宗麟宛て1562年の親書は、国王が宗麟のキリスト教への改宗を勧める趣旨であり、さらに同国王の大村純忠宛て1565年の親書は、純忠がキリスト教に改宗したことを知り、主を賛美する趣旨である。次に有馬晴信がポルトガル国王に送った1582年の書翰は、イエズス会宣教師によって布教が行なわれていることに対する、謝意を表明した挨拶状である。大村純忠が同国王に送った1582年の書翰は、イエズス会宣教師による布教を喜び、同国王による庇護を願った内容である。(また島津貴久がインド副王に送った永禄四年の書翰は、インドとの通交を希望する意向を伝えたものである。)

上記の通りで要するに、ポルトガル国王と九州諸大名との間で取り交わされた書翰は、いずれもカトリック布教を賛美するだけで、具体的な課題は何一つとして記されていない。内容のない単なる挨拶状に過ぎない。1647年に渡来した使節は、その遣使の目的は明確であるが、国王の書翰を持参したわけではない。

それでは1588年インド副王メネゼスの、秀吉宛て親書はどうであろうか。この書翰も、上に記したポルトガル国王が九州諸大名に送った親書と、基本的には同じ特色を有すると言ってよい。その内容は、秀吉の功業を賛美し、秀吉が宣教師に恩恵を与えることを喜び、宣教師の要請により秀吉に謝意を表明するために巡察師を派遣する旨を述べ、一層の恩恵を請うものである。巡察師ヴァリニャーノを使節として派遣するのであるから、書面は比較的長文で丁重ではあるが、そこに記されているのはカトリック布教に絡む儀礼的言辞のみだという、基本的性格は変わらない<sup>7)</sup>。

したがって今この副王の親書を主題に、日本の側から考察した小論を作成するに当たっては、書翰の文面の検討を蔑ろにしてよいわけではないが、それはむしろ従であろう。それよりもむしろ、遣使と親書に対する豊臣政権の対応、同政権の外政一般の中で本遣使の占める位置、日葡通交の一世紀において、今回の遣使がいかなる意義を有するか等の観点からの考察が求められるように考える。

## 二

イエズス会巡察師ヴァリニャーノが、帰国途上の少年使節一行を伴って、インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスの使節としてマカオに着いたのは、1588年7月28日であった<sup>8)</sup>。マカオに着いた彼は、前年天正一五年六月一九日(1587年7月24日)豊臣秀吉がいわゆる伴天連追放令を發布したこと、および準管区長ガスパル・コエリョを中心に在日イエズス会士の間で、この際武力をもって迫害者秀吉に抵抗しようという企てが進行していたことを知った。それだけでなく秀吉の伴天連追放令そのものも、コエリョ等による軍事的行動が秀吉を刺激したからだとは彼は判断した。ヴァリニャーノ自身がマカオ滞在中の1589年6月12日付けで、イエズス会総長に宛て書き送った書翰の一節を引用する。

今年は日本においてもシナ布教においても、大きな難儀が数多く生じた。われらが主は特別の

摂理により、私が様々な事柄を解決し取り決めることが出来るように、このシナの港〔マカオ〕にいることをお命じになったようだ。もしも私が当地にいなかったら、このシナのカーザやシナ布教のパードレたちのみか、日本から来た何人かのパードレも、それらの事柄に直面して、深刻な困惑と狼狽に陥ったことであろう。日本からは、昨年叙品を受けるためにやって来たが、当地に司教がいないのでその年の内に日本に帰ることが出来なかった、三人のイルマンの外に、今年同じく叙品を受けるために来た別の〔イルマン〕が来ていた。前述の通り、彼らは今度私と一緒に〔日本に〕行く。さらに、日本で有馬のカーザの上長を永年勤め、その後下〔のカーザの上長〕になったパードレ・ベルチョール・デ・モーラも来た。もしも当地に私がいたら、日本での出来事について私に詳しい情報を与え、そしてその地で準管区長パードレやその他何人かの者たちが考えついた、その解決策を説明するために、準管区長パードレが彼〔モーラ〕を派遣したものである。

その解決策とは、日本のキリスト教会を安全なものにするよう、フィリピン総督や国王陛下に働き掛けねばならない、というものである。またもしも私がすでに死亡しているか、または当地にいないようなら、前述の解決策について直接フィリピン総督と相談するためにその地に行き、そしてさらにそこからヌエバ・エスパーニャ経由で国王陛下の許に赴いて相談し、また猯下にも日本の事情について詳しい情報を与えるように、というものであった。しかし検討された解決策は私には、不適切である許りか非常に危険であり、さらに実行不可能なものと思われた。それ故、それについて語ったり相談したりすべきでない、私には思われた。

そこで私は次のように決定した。すなわち前述のパードレ・ベルチョール・デ・モーラは、私と一緒に日本に帰るものとする。そして猯下が私をそこに派遣した以上、そこでの正規の管区会議において相談すべきだと思ったことを、真っ先に取り上げ協議する。また副王が、前述の親書を持って行くようにとの勅令をわれわれの許に送ってきたのであるから、われわれが副王の名で関白殿の許に持って行く親書と進物とを持参して、日本の貴人たちと一緒に私が行くことによって得られる利益は何か、を真っ先に見定める。その際もしも必要なら、管区会議において管区代表としてローマに行く者を一人選び、日本の利益のために思いつく解決策について、国王や副王よりも前に先ず猯下と、思いついたことの凡てについて相談することは可能であろう。

いわんや今相談しているような解決策は、私の考えでは、適切でないし真の解決策でもない。それどころか、それを成し遂げることが出来たら、かえってわれわれにとり非常に危険であろう。そうなるとは私も信じない。この解決策の要点は、日本に要塞を作るべく、三〇〇～四〇〇人ものスペイン人兵士の守備隊〔の派遣方〕を、国王陛下に要請することであった。準管区長パードレやその他何人かの者たちは、それによって日本キリスト教会は確かなものになると考えたのだ。これが一層速やかに行なわれるように、彼らはフィリピン総督の許に人を派遣してこの支援を要請した。この解決策は、われわれ一同によって相談されたり追求されたりすること自体が不適切であると、私には思われる。さらにまた、準管区長パードレが想像している通りに事が運ぶには、多大の困難が伴う、また不可能な解決策であると、私には思われる。それ許りか、日本の改宗のためにわれわれが望んでいることにとって、非常に危険であり害になると、絶対に確信する。〔中略〕

迫害は厳しさが増したわけではないが、今でも続いている。この暴君が活着している間は、続くものと思われる。しかし副王が彼に送るこの親書と進物とにより、またこれら日本の貴人たちが行くことにより、彼の内に何らかの変化が生じるかも知れない。彼は傲慢にも自らを崇拜させ、その上神と見做されたがっているのだから、他人と協調することは出来ないであろうが、しかし日本

は変転極まりなく、一時間の内にはすべてがひっくり返る国なので、われわれが日本に着くやいなや、多大な変化に出会うかも知れない。その〔変化の〕すべてにおいて、常にキリスト教会が進展し一層大なる活力を得るものと、私はわれらが主を信頼する。<sup>9)</sup>

この書翰は、ヴァリニャーノが副王の親書を持って日本に渡来した当時の、キリシタン教会や日葡関係の実情を良く伝えている。ヴァリニャーノはマカオまでやって来て、はじめて日本の事情つまり秀吉の禁教令の発布と、それに対する教会側の対応とを知ったわけだが、彼はそれを上の文中に見える、日本からマカオに叙品を受けに来たイルマンたちと、重要な使命を帯びて同じく日本からマカオに来た、パードレ・ベルチョール・デ・モーラ等から相当正確な情報を得たと言ってよいであろう。書翰の趣旨を次に整理する。

一、準管区長コエリヨ等が中心となって日本イエズス会が考案した対応とは、要するに三〇〇～四〇〇人のスペイン兵を招致し日本国内に要塞を作ってそこに駐屯させ、教会の守りとする。その実現に向けて、パードレ・モーラが本国国王やフィリピン総督の許に使いする、というものである。

二、ヴァリニャーノは日本イエズス会が考えたこの策を、不可能であるばかりか危険なものだと斥けて、モーラを日本に連れ戻すこととした。そして日本に着き次第会議を開き、採るべき善後策を協議し、そして副王の親書と進物を携え、帰国した少年使節を連れて秀吉に謁見することの是非を審議することとした。

三、ヴァリニャーノは自分が副王の使節として、その親書と進物とを持参し、少年使節を伴って秀吉に拝謁することによって、教会を取り巻く環境が好転することを期待していたようである。

インド副王が秀吉の許に使節を送ることを決め、親書や進物を用意したのは、まだ禁教令発布以前である。親書が前述の如く、宣教師に対して秀吉が与える恩恵を謝すという、禁令発布の直後に奉呈するにすれば、いささか間の抜けた文面になっているのはそのためである。単なる儀礼的な書翰が、当初の主旨とは違った、そしてかなり重要な意味合いを持つに至ったと言ってよい。つまりヴァリニャーノとしては、使節として秀吉に謁見する機会を利用して、秀吉の教会に対する姿勢を軟化させようとした。

### 三

ヴァリニャーノ一行が長崎に到着したのは、1590年7月21日である。彼は同年8月13日から25日まで、加津佐で協議会を開き、日本イエズス会が直面した諸問題を取り上げた。そこで特に注目すべき点としては、武力に頼ることを容認してきた従来の布教政策を放擲し、権力者に対し慎重に対応することを確認した。巡察師ヴァリニャーノの在日イエズス会士への指示であると同時に、ヴァリニャーノ自身の軌道修正でもある<sup>10)</sup>。その時点でもヴァリニャーノは一貫して、自分が副王の使節として秀吉に謁見することが、秀吉の教会政策を軟化させる契機になりうるという期待を抱いていた。またそのような期待を抱かせるような素振りを、政権側が示したこともあったようである。それは1590年10月12日付け長崎発の、彼の書翰により明らかである。

今から次のように言うことが出来る。すなわち関白殿を宥め、三年前からキリスト教会やパードレたちに対して、彼が行ってきた迫害を終わらせるために、われわれが執りうる解決策はすべて、この使節に依存し、成否はそれにかかっている。というのは、これらの責人〔天正少年使節〕がわれわれの諸事について証言し、それにより真実が分かり、もしや関白殿をこの迫害に駆

り立てたかも知れない、幻や憶測が拭われるであろう。そればかりではなく、彼らがかくも恩恵を施されてヨーロッパから帰国したことにより、インド副王がこの機会に前述の関白殿に宛てた進物を添えてひとつの使節を送る運びとなり、そしてその使節の任をわれわれに託した。副王が馬とその他いくつかの品物を贈り、彼ら〔貴人〕がヨーロッパから齎らした品物の中から何点かの豪華な反物をそれに加え、豪華な進物が整えられた。これ程の進物は、このような機会でなければ、用意されることは絶対にあり得ないであろう。

われわれがゴアを発った時には、この迫害について何も分かっていなかった。われわれは単に、当時関白殿がパードレやキリスト教徒に対して、恩恵を施してくれていたことに対し謝意を表すために、この進物を携え使節の任を帯びてやってきた。しかし事の経緯をご存知である神の摂理は、この迫害に対する解決策を得ようという目的に対し、穏和な、父性愛に充ちた措置を講じて下さった。〔中略〕

この人物は異教徒であり、彼の幸せはすべてこの世にあると信じているので、しかも彼は今や日本全土の支配者であるから、己れの声望と名とを永遠に残すことの外には何の望みもない。それ故かくも荘重な使節を伴って、このような進物がインドから彼ののもとに齎られることを、非常に大なる名誉と声望だと考える。このようなことは、君主国日本（彼らはそう呼んでいる）の他の支配者には、今までに決してなかったことである。それ故これにより、彼の名がいかに知れわたっていて、高く評価されているかが、日本で分かると彼は考えた。というのは二〇〇〇レーグワの彼方から、かくも偉大な支配者が使者を送って彼を訪問させたからである。これは彼を直ぐに満足させた。すなわち彼は、キリスト教会やパードレたちに対して激怒し、猛り狂っていたにもかかわらず、私がこの使節の任を帯びて渡来するということを二年前に聞いて、明らかに鎮まり、私が前述の使節の任を帯びて来ることを命じた勅令を与えたほどである。また、在日パードレが皆彼の命令に背いて、有馬・大村・天草の王の領土に留まったことを知っても、あたかも彼らが日本にいることを知らないかの如く、前述の領主たちやパードレたちのことを見て見ぬ振りをした、と信ぜられている。パードレたち全員が滞在していることが知れわたり、彼らはキリスト教徒たちに対し公然と聖務を行ない、異教徒の改宗にも従事し、この三年間に三万五〇〇〇人以上の異教徒がわれらが聖信仰に改宗し、その全員に洗礼を授けはしたが、彼ら〔パードレ〕が当初〔日本に〕行った時とは異なる衣装を身につけて、萎縮して暮らしていることを知って満足した。この使節への期待がなければ、それを見逃すことなど絶対にあり得ない。

今われわれが到着し、われわれの到着を彼に報らせ、今から一〇年前信長の時代にも日本に来たことがあって、すべてのパードレの上長である巡察師パードレがこの使節の任を帯びて渡来したことが、公然と彼に告げられるや、彼は非常に喜びを示し、戦いから京都に帰って来たら直ぐに、私が前述の使節の任を帯びてそこに行くようにと命じた。そして一国の領主であり関白殿に最も寵愛され重んじられている浅野弾正〔長政〕が、われわれを運ぶための船を派遣するように、われわれに誰かが随伴するように、そして道中われわれに榮譽を与え手厚く遇するように、と彼〔関白殿〕は命じた。すべてのキリスト教徒や異教徒が異口同音に言うところによると、その内にこの迫害は終るであろう、この使節によりわれわれに平和が戻るであろう。〔中略〕

この使節が一層よく関白殿に迎え入れられ、しかも一段と大なる榮譽を博するためには、キリスト教徒の領主たちやポルトガル人たち、さらにはパードレたちは、次のようにするのがよいと考えた。すなわち、この使節は副王の名で赴くのであるから、船に乗って来た何人かのポルトガル人が私と一緒に赴くのがよい、と。そこで彼らの内の八人が行く。<sup>11)</sup>

この書翰により、秀吉の教会政策を転換させるために、ヴァリニャーノをはじめ教会関係者が、副王の遣使に期待を寄せるころきわめて大きかったことを、改めて確認することが出来る。副王の秀吉宛て親書はもともと、キリシタン布教に対して秀吉が好意的態度を執ったことへの謝意の表明、つまりかつてポルトガル国王が九州のキリシタン大名に書翰を送ったのと、その趣旨は同じであったものが、思わぬ事態の急転により、当初は意図しなかった意味合いを帯びることになった旨が、正直に記されている。秀吉は名誉心が強くそのため、インド副王が遠くからはるばる使節を派遣してくるということは、この際きわめて効果的だという判断が示されている。

秀吉は今回の遣使のことを、すでに二年前すなわち1588年には知っていたという。それを知って以来、天正一五年（1587年）のキリシタン禁令に背いて宣教師たちが日本に留まり、布教活動が続いていることを知りながら、見逃してきた。遣使がなかったら、これは絶対にあり得ないことだという。そして使節として日本に来たのが、巡察師ヴァリニャーノだということを秀吉が知って喜び、戦いから戻ったら上京するように命じた。これは、小田原の北条氏を征伐した戦いを指す。すなわち秀吉は天正一八年三月一日（1590年4月5日）京都を発って、同年四月三日（5月6日）小田原に到着、同年七月五日（8月4日）北条氏降り、ここに秀吉による全国統一が事実上完了した。秀吉は同年七月一七日（8月16日）小田原を発って、陸奥・出羽の平定に向かった。各地を経略しつつ進軍、同年八月九日（9月7日）陸奥の黒川城（会津若松）に入り、同月一二日（9月10日）黒川城を発って、同年九月一日（9月29日）京都に凱旋した<sup>12)</sup>。

前記の如くヴァリニャーノの長崎到着は1590年7月21日であり、そのことが秀吉に報ぜられるや彼が、京都凱旋後直ちに上洛するよう命じた旨、前引1590年10月12日付けヴァリニャーノの書翰に見える。秀吉の許にインド副王の使節ヴァリニャーノ到着の報せが届き、そして彼がこの指示を与えたのは、小田原在陣中のことだと見てよいであろう。浅野弾正少弼長政も今回の小田原征伐に従軍、小田原が落城した七月五日（8月4日）の内に秀吉は、浅野長政を陸奥に向け派遣している<sup>13)</sup>。その長政がヴァリニャーノ一行の上洛に当って、船の手配や道中の随伴者等について指示を与えたという。とすると、秀吉がこのような命令を下したのは小田原在陣中の、それも七月五日以前のことであろう。

もっとも浅野長政の奥羽経略は、一揆の発生や伊達政宗と蒲生氏郷との間の不和等、事態は容易ではなく、彼は翌天正一九年に入ってもなお、陸奥二本松に滞留することを余儀なくされた。このため現実に一行のための船が、長政によって手配されたわけではない<sup>14)</sup>。

\* \* \*

さてヴァリニャーノ一行が長崎を発ったのは1590年11月末～12月初で、12月中に京都に着いた<sup>15)</sup>。一行が京都聚楽第で秀吉に謁見したのは、天正一九年閏一月八日（1591年3月3日）である<sup>16)</sup>。

ヴァリニャーノ一行の長崎から京都までの旅の様子や、聚楽第での謁見等については、フロイスが詳しく記している<sup>17)</sup>。先に引用したヴァリニャーノの1590年10月12日付け書翰には、キリシタン大名・ポルトガル人・パードレたちが秀吉対策のために、副王の名で派遣された使節であるから、船に同乗してきたポルトガル人を供に従えるようにと知恵を授けたことが見えていた。同じことがフロイス著『日本史』にも記されている。こちらにはもっと具体的に、黒田孝高・小西行長等がヴァリニャーノに書翰を送り、一行には世俗のポルトガル人を多く、パードレを少なくするよう忠告した。有馬晴信や大村喜前等も同じ意見であった、と見える<sup>18)</sup>。黒田孝高は天正一三年（1585年）に受洗したキリシタンであった。天正一五年キリシタン禁教令発布に伴って、高山右近が改易処分を受けて以来、彼は小西行長と共に教会にとって、最も頼りになる人物であったと言ってよい<sup>19)</sup>。

今回の副王使節ヴァリニャーノの秀吉謁見についても、孝高はいろいろな点で教会側に好意的な尽力をした<sup>20)</sup>。彼や小西行長がヴァリニャーノに対し、上記の如き忠告をしたその趣旨は言うまでもな

く、副王の使節からキリシタン色を極力希薄にしようとしたことであつた。

結局一行は、巡察師ヴァリニャーノ、パードレ・ディオゴ・デ・メスキータ、パードレ・アントニオ・ロペス、ナウ船のポルトガル人一三名、少年使節四名と彼らのポルトガル人の従者七名、通訳を勤めるポルトガル人イルマン・アンブロジオ・フェルナンデス、ヴァリニャーノの通訳イルマン・ジョアン・ロドリゲスの総勢二九名であつた<sup>21)</sup>。

前引ヴァリニャーノの書翰には、彼が副王使節として来訪することに秀吉が喜んだように記されていた。もしもこの記述が真実ならば、それは小田原在陣中に、使節到来の第一報を受けた際の秀吉の反応に相違ない。その秀吉が京都に凱旋してからは、〈より冷静な〉対応をするようになり、それが黒田孝高や小西行長の忠告となって表れたといえよう。その辺の事情についてフロイスは、日本には教会の敵がおり、彼らが秀吉に虚偽の報告をしたために、秀吉は使節を疑い、パードレが自分を説得して教会を以前の状態に戻させようとの策略ではないか、との疑惑を抱き始めた、と記す<sup>22)</sup>。

#### 四

副王使節への秀吉の対応は、折から展開していた近隣諸外国に対する、彼の一連の外政と無縁ではあり得ない。先ずヴァリニャーノ一行の一足先に、朝鮮通信使が秀吉に謁見している。朝鮮通信使とは、朝鮮から国書と進物を持って、室町幕府の足利将軍や江戸幕府の徳川将軍の許に派遣された外交使節である。室町時代に来朝した通信使は三回のみである。それぞれ将軍襲職祝賀や倭寇禁止要請を、来朝の理由とした。これを迎える足利将軍もそのような認識で迎えており、双方の間にこの点ずれはなかった。室町時代に来朝した三回の最後は、嘉吉三年（1443年）である。豊臣政権下では二回すなわち、天正一八年（1590年）と慶長元年（1596年）である。今ここで問題にしているのは、もちろんこの内の前者である。嘉吉三年以来実に一四七年振りである。室町時代とは異なり、通信使を送った朝鮮側と迎えた日本側との間には、その意図するところに食違いがあつた。今回の通信使が派遣されるに至った事情について、少し記してみる。

秀吉が〈唐入り〉すなわち中国征服の意図を公表した時期は、天正一三年（1585年）秋にまで溯る<sup>23)</sup>。翌天正一四年三月（1586年5月）イエズス会日本準管区長コエリョが大坂城で秀吉に謁見した際には、朝鮮・中国を征服するために自ら渡航する決意であることを打ち明け、その際イエズス会に帆船を二艘用意してもらいたい、と要請した<sup>24)</sup>。天正一四年六月（1586年8月）秀吉は対馬島主宗義調に宛て、九州動座の折高麗征伐を執行するから、従軍するようにと書き送った。

天正一五年秀吉が島津征伐のために九州に出兵、薩摩の川内に在陣中、対馬の柳川調信が使者として、宗義調の書翰と進物を持って来た。その狙いは、朝鮮に対して俄に出兵することの非を秀吉に説き、対朝鮮交渉については対馬が責任を持つ旨約束することにあつた。宗義調の書翰を受け取った秀吉は、朝鮮国王に対し、内裏へ出仕して日本に服属することを要求し、もしも聞き入れれば同国王の本領を安堵するが、さもなければ出兵して、朝鮮で宗氏の知行を加増しようとした。

秀吉は宗氏を介して、朝鮮国王の帰服を要求しただけでなく、さらに小西行長・加藤清正等にも宗氏に対してこれを督促させた。これに対し宗義調は家臣を朝鮮に派遣し、秀吉が日本の新国王になったと言って、それを慶賀する通信使を發遣するよう要請した。秀吉の許に国内統一を賀す通信使を派遣させることで、朝鮮国王の内裏出仕にすり替えようとしたわけである。朝鮮通信使一行は天正一八年三月京城を發ち、天正一八年七月一九日（1590年8月18日）宗義智に伴われて京都に到着した。すなわち秀吉が北条氏を下し、奥羽経略に向け小田原を發った直後であつた。秀吉が京都に凱旋したのは、先に記した通り天正一八年九月一日であるが、一一月七日（1590年12月3日）聚楽第で通信使を引見した。秀吉はこの通信使を朝鮮国王の名代と考え、入貢したものと判断して、喜んで引見した。



そして国王への返書（天正一八年十一月付）に、明国を征伐する時は朝鮮国王が嚮導するよう要求した。通信使は当然この返書の文面に不満を抱き、改作を要求したが認められなかった。秀吉の返書について、先方が文面の修正を求めた点は、インド副王使節の場合と類似している。天正一九年三月宗義智は通信使を伴って対馬に帰り、使節はそのまま帰国したが、秀吉の命令は、宗義智や小西行長を窮地に陥れた。彼らは嚮導をほかして、秀吉征明に際し朝鮮通過を承認させようとした。宗義智は自ら朝鮮に渡り、説得に努めた。しかし明を宗主国と仰ぐ朝鮮にとって、秀吉の要求はあまりにも非常識であり、それに耳を藉そうとはしなかった。

一方このような裏工作が進められていることを知らない秀吉は、征明の準備を着々と進めた。天正一九年八月（1591年9月）秀吉は、大陸に向け出陣する時期を「来年三月一日（1592年4月12日）」と宣言した。天正一九年二月二七日（1592年2月10日）には関白職を秀次に譲って国内の政治を委ね、自らは外征に専念する姿勢を明確にした。そして翌天正二〇年一月五日（1592年2月17日）には、秀吉は明国出兵のため、諸将に出陣を命じた<sup>25)</sup>。

\* \* \*

次に秀吉の対琉球外交についても、少し触れておきたい。秀吉は九州平定後、島津氏を介して琉球に入貢を求めた。島津義弘が天正一六年八月一二日（1588年10月2日）付け書翰を、琉球王尚永に送ったのがその初見である。翌天正一七年にも秀吉は、島津義久をして琉球王尚寧に入貢を督促させた。同一七年五月二七日（1589年7月9日）尚寧はとりあえず天竜寺桃庵等の派遣を決めた。桃庵は島津義久に伴われ、同年九月大坂に到着し、その後程なく聚楽第で秀吉に謁見した。秀吉は天正一八年二月二八日（1590年4月2日）付けで、琉球王に答書を与えた。小田原落城の後島津義久は、天正一八年八月二一日（1590年9月19日）付け書翰を琉球王尚寧に送り、秀吉による関東平定を報せて、管弦の役者を献上してこれを祝賀するよう求めた。これに対し尚寧は、天正一九年八月二一日（1591年10月8日）付け書翰を島津義久に送り、関東平定を祝賀して方物を送る旨報じた。それは翌天正二〇年春鹿児島に到着した<sup>26)</sup>。

さらに言えば、秀吉はスペイン領フィリピンに入貢を求めた天正一九年九月一五日（1591年11月1日）付け書翰を認め、原田孫七郎なる者に託した。原田がこの書翰を持ってフィリピンに渡るのは、天正二〇年四月（1592年5月）のことで、以後数次にわたり秀吉とフィリピン総督との間で、使節と書翰のやりとりが行なわれ、サン・フェリペ号事件、二十六聖人殉教事件へと展開する<sup>27)</sup>。

また秀吉は文禄二年一月五日（1593年12月27日）付け、高山国（台湾）宛ての書翰を用意した。南蛮・琉球も既に朝貢している。原田喜右衛門を遣わして入貢を促すが、もしも来朝しなかったら諸将をして征伐せしめると述べている<sup>28)</sup>。伝存する高山国宛ての書翰はこのように強硬な内容であるが、しかし結局はこの書翰は、秀吉が朝鮮出兵に軍費を費やして余力なく、先方に送られることはなかったようである<sup>29)</sup>。

## 五

以上の記述により、秀吉が全国平定を達成し、そして一連の強硬な外政が展開されていたまさにその時に、インド副王の親書がヴァリニャーノにより齎らされたことが分かる。先に記した通り副王の書翰はもともと、キリシタン教会に対し恩恵が与えられていることへの謝意を表明することに趣意があった。それが日本国内事情の変化により、その同じ親書を、秀吉の対教会政策を好転させるために、利用しようとしたわけである。したがって秀吉の外政の一環として、今回の副王使節への対応を考える場合、副王親書の文面よりも秀吉の返書の内容の方が、重要な意味を持つことは否めない。つまり親書は取り立てて内容のない、儀礼的言辞に終始しているに過ぎないが、それを受け取った秀吉の方

は、教会側の甘い期待を打ち砕く、情け容赦のない返書を用意した。

聚楽第で一行が秀吉に謁見したのは、天正一九年閏一月八日（1591年3月3日）であった。謁見の有様については、フロイスが克明に伝える。副王親書は、ゴアで邦訳文が用意されて同じ袋に入れて齎らされ、聚楽第における親書奉呈の場では、この邦訳文が秀吉のために朗読されたという。副王から秀吉に贈られた進物は、副王親書に記載されている通りである（本論「附録」参照）。

秀吉からはこれに対する返礼として、副王に宛て返書を認め、進物が用意されたが、その前に引見の場で秀吉は一行の一人一人に、銀と小袖を贈った。その銀高は、ヴァリニャーノに二〇〇枚、メスキータとロペスの二人のパードレに、それぞれ一〇〇枚、ナウ船のポルトガル人一三名と少年使節四人および従者七名にそれぞれ五枚、通訳のイルマン二人にそれぞれ三〇枚であって、合計五八〇枚、すなわち二四九四タエル（銀一枚は四タエル三マス）に上った。絹の小袖は全部で三六枚で、一〇〇タエルに値したという<sup>30)</sup>。

謁見の場の雰囲気はきわめて友好的であったように、フロイスは強調する。「〔関白は〕その日は、万事につけそれ以上望めぬほどの喜びと満足の意を表していた。」<sup>31)</sup>とも、「京都では、これ程までの、思いもよらぬ好意を〔関白が一行に寄せた〕話でもちきりであった。」<sup>32)</sup>とも記す。キリシタン禁教発布下という、教会にとって逆風が吹いている時期であり、あるいはもっと厳しい接し方をされるのではないかと、当然予想もしたのであろう。それにしても案外友好的な態度であった、という思いからフロイスがこのような記述をしたものかも知れない。しかし秀吉は使節に対して、好意許りを示したわけでは決してなかったことは、いくつかの重要な事実が明らかにする。

まず秀吉は使節を引見する以前から、もしこの使節が副王の名で、パードレたちのために執り成しをするために来るなら、彼らのことは絶対に許すべきでないから、使節には会いたくない、と宣言していた<sup>33)</sup>。この秀吉の疑念の延長と言うべきであろうが、彼は一行引見の後、使節が偽物ではないかとの疑念を表明した<sup>34)</sup>。そして以下述べる如く、秀吉が用意した返書が余りに情け容赦のない文面であったために、イエズス会側が愁訴し、結局一部修正される。

秀吉が京都所司代前田玄以を通して、西笑承兌等に宛て返書の起草を指示したのは、使節一行を引見してから四カ月半経ってからであった。『鹿苑日録』天正一九年五月二九日（1591年7月19日）条に次のように見える。

晚来自玄以法印書翰来。即乘荷輿。與上方同伴而赴玄以甲第。聖門・菊亭殿・上方・惟杏・予・紹巴。南蛮返章之儀各々相評。上方執筆々之。<sup>35)</sup>

つまり前田玄以の許で聖護院（天台宗寺門派総本山）門跡道澄、右大臣菊亭晴季、先の鹿苑僧録西笑承兌、臨濟宗の僧惟杏永哲、時の鹿苑僧録で筆者の有節瑞保、連歌師里村紹巴が論議し、承兌がその結果を草案に纏めた。その四日後彼らは秀吉の許に呼ばれた。同じ『鹿苑日録』同年六月三日（1591年7月23日）条に次のように見える。

自玄以法印折紙来。自関白殿下被招。乘荷輿赴玄以甲第。聖門・菊亭右大臣・上方・惟杏・臨江・昌叱・予会矣。侑盃茶話。即伺候于殿下。御対面。及南蛮返章之儀。各々賜雲門閑話。南蛮国伴天連以邪法排正法。自今以往。於本朝。以邪法欲作濟度衆類。悉以可被加誅由也。只於本朝者。商賈往来被許之由也。<sup>36)</sup>

この六月三日に秀吉の前で返書起草について相談に与った人物を、先の五月二九日条に見える人名

と照合して、連歌師里村昌叱が加わったが、それ以外は同じ顔触れである。天正一九年五月二九日に一同評議の上承兌が執筆し、秀吉の許に齎らされた返書の草案について、六月三日秀吉によりそのまま裁可が下りたか、または一部修正がなされたか、少なくとも返書が相当煮詰まったと言ってよい。このようにして出来上がった返書案文がすなわち、今日天理大学附属天理図書館が所蔵する天正一九年七月二五日（1591年9月12日）付け秀吉のインド副王宛て書翰である。

次にその全文を掲載する（読み下し文に改めた。（一）（二）（三）による文章の区分は引用者が行なった）。

（一）遙に音章を寄す。披て之を読む。則ち万里の海山を眼界に見るに異ならず。来簡の如く、本朝は邦城六十有余、積年乱日多く、治日は少なし。故に凶徒奸謀を好み、郡士党与を作す。而して朝命に服従するを得ず。予也、壯歳の日、曛旭、之を嘆惜す。身を脩むるの術、国を治むるの要、深謀遠慮し、而して仁明武の三を以て、諸士を撫養し、百姓を哀憐す。賞罰を正し安危を定む。此に由て久しく星霜を歴ずして天下混一、磐石を安んずるが如し。異邦遐陬に及ぶも、亦来享せざる莫し。東西南北唯命のままに従ふ。此時に当り、聖主の勅を囊中に伝へ、良將の威を塞外に振り、四海悉く関梁を通し、海陸の賊徒を討ち、国家人民を安んず。吾邦已に晏然たり。然りと雖も一たび大明国を治めんと欲するの志有り。不日に楼船を泛べて中華に到るは、掌を指すが如し。其の便路を以て其地に赴く可し。何ぞ遠近異同の隔を作さん。

（二）夫れ吾朝は神国也。神は心也。森羅万象一心を出ず。神に非れば其靈生ぜず。神に非れば其の道成らず。増劫の時此の神増ぜず、滅却の時此の神減ぜず。陰陽不測、之を神と謂ふ。故に神を以て万物の根源と為す。此の神、竺土に在らば之を喚んで仏法と為し、震旦に在りては之を以て儒道と為し、日域に在りては諸を神道と謂ふ。神道を知らば則ち仏法を知り、又儒道を知る。凡そ人の世に処するや、仁を以て本と為す。仁義に非れば則ち君君たらず、臣臣たらず。仁義を施さば、則ち君臣父子夫婦の大綱、其の道成立す。若し是れ神仏の深理を知らんと欲さば、懇求に随ひて之を解説す可し。

（三）爾の国土の如きは、教理を以て専門と号す。而して仁義の道を知らず、此の故に神仏を敬せず、君臣を隔てず、只邪法を以て正法を破らんと欲す。今従り以往、邪正を弁へず、胡説乱説を作す莫れ。彼の伴天連の徒、前年此の土に至りて、道俗男女を魔魅せんと欲す。其の時且つ刑罰を加ふ。重て又此の界に來りて、化導を作さんと欲さば、則ち種類を遺さず、之を族滅す可し。臍を噬む勿れ。只好を此の地に修めんと欲する心有らば、則ち海上已に盜賊の艱難無く、域中幸に商賈の往還を許す。之を思ふ。

南方の土宜、注記の如く領受す。是自り給賜する所の方物、目録別楮に在り。余緒は使節の口実に分与す。不宣。

天正拾九年七月廿五日

関白

印地阿 毘曾靈

目録 別紙也

給賜

太刀	国房
腰劍	光忠 <sup>37)</sup>
脇刀	貞宗
長刀	秋広

甲冑 式領<sup>38)</sup>  
頬当 袖  
鉄蓋 脚当  
天正拾九年七月廿五日

39)

文面はその内容から (一) ~ (三) に三分することが出来る。

- (一) 国内統一の実績を述べ、証明の意思表示をした。つまり自己の実力を誇示した。
- (二) 日本は神国たることを謳い、神儒仏を正法とする旨言明した。
- (三) キリシタンを正法を破る邪法と認定して、激しい表現でこれを厳禁した。しかし同時に貿易は許可した。

先に引用した『鹿苑日録』六月三日条の記事は、起草された返書の趣旨を記したものである。「伴天連邪法を以て正法を排す。今より以往、本朝に於いて、邪法を以て衆類済度を作さんと欲さば、悉く以て誅を加へ破る可き由也。只本朝に於いては、商賈の往来は許さるるの由」とあるが、これはまさに上の (三) である。『鹿苑日録』に特にこの点が記されているのは、返書の核心はここにあり、これを副王に伝えるのが秀吉の真意であったことを明らかにする。(一) ~ (三) の内容であるが、天正一五年六月一九日付け定書、いわゆる伴天連追放令と対比させると、(一) を除くと、(二) (三) は伴天連追放令の趣旨と同じだと言わねばならない。つまり秀吉のキリシタン観や、ポルトガル船に対する姿勢は一貫している。

ところで秀吉のインド副王宛て返書であるが、今日伝存している上記の案文と同文の書翰正文が、副王の許に届けられたわけではなかった。案文について報せを受けたイエズス会士は、このような文面の返書は到底受納出来ないと判断し、それを書き直してもらうために全力を尽くした。彼らにしてみれば、これでは何のための遣使であったかということになる。イエズス会側が特に問題にした点がまさに、上の (三) の件であった。1591年10月6日付け長崎発ヴァリニャーノのイエズス会本部宛ての書翰に、次のように見える。

10月5日の今日になっても、未だ関白殿はこの返書を与えない。もっとも副王に贈るためのいくつかの品を彼が用意させ、さらに返書も既に書かせたとの情報をわれわれは掴んでいる。その中で彼は次のように言っている。すなわち、我らは当地で良き法を持っている。パードレたちが神<sup>カミス</sup>や仏<sup>フォトクス</sup>に背き、これを破壊する法を当地で説くためにやって来たので、予は既に日本から彼らを追放した。彼らが当地に留まることは決して望まない。もしも彼らの内の何人かが、この法を説くために当地に留まるか、または戻ってきたら、彼らの処刑を命じ、彼らの記憶が一切残らないようにするつもりである。副王はそれをよしとすべきである、と。<sup>40)</sup>

ヴァリニャーノがこれを書いた時には既に、天正一十九年七月二五日 (1591年9月12日) 付け副王宛て返書案文の、少なくとも重要箇所については、在京のイエズス会士から報せを受けていたことが分かる。上の文中に返書の文面として記されていることは、先の案文の (三) の件である。秀吉が強調したい点はまさにこの (三) であり、一方イエズス会士としては、このような文面の返書を受け取るわけにはいかない。直ちに在京のオルガンティーノ等が中心になって、返書を書き替えさせるための努力が払われた。イルマン・ジョアン・ロドリゲスが主として秀吉との対応に当り、京都所司代前田玄以が教会に好意的な姿勢を見せ、結局返書は一部書き直された。その間の経緯については、イエズス会士が詳細に伝える。フロイスは「(関白は) 起草した仏僧たちにそれ〔返書〕を書き直させるの

に、大変難儀をしたが、しかし結局書き直された。」と記す。仏僧たちとはもちろん先に返書案文の起草に当たった承兌等を指すが、彼らは逆に案文の修正に相当激しく抵抗したことが窺える<sup>41)</sup>。

## 六

秀吉が一旦起草した返書案文を、国内での活動を厳禁した筈の宣教師からの要望で書き直すとは、異例なことだと言わねばならない。承兌等が抵抗したのも当然である。ここで返書案文の修正がなされた背景として、当1591年夏長崎に渡来したポルトガル船積載金の購入をめぐるトラブルが起り、その解決に当ってイエズス会宣教師の存在意義を、秀吉が改めて認識したことを指摘せねばならないであろう。事件の概要を記してみる。

天正一十九年七月一日（1591年8月19日）ポルトガル船が長崎に着いた。カピタン・モールはロケ・デ・メロ・ペレイラであった。鍋島直茂と毛利吉成が秀吉の命を受けて、軍勢を率いて長崎にやってきて、同船積載の金の大部分を安価で買い占めようとした。ポルトガル人は、イエズス会パードレを介して交渉しようと言ったが、毛利吉成はパードレの介入は不要であると言い張った。ポルトガル人側は天正一十九年七月一五日（1591年9月2日）付け、カピタン名の訴状を持たせて秀吉の許に使者を送り、事の次第を訴えた。訴状には、売買の自由であるべきことを謳った秀吉の朱印状に背いて、日本側が理不尽の押買いを強行しようとした。四〇年余の対日貿易で初めての艱難である。今後朱印状の趣旨を徹底させてもらいたい、といった訴えが記されている<sup>42)</sup>。

この訴状に添えてポルトガル側は、奉行人たちが如何に理不尽な振舞いに及んだかを、事細かに逐一列挙した覚書きを差し出した。その覚書きを次の如き文で結んでいる。

至日本数年渡海仕、別而去年已来、南蛮のびずれい、向後此国通用可仕旨、被立勅使候、以其筋目、毎年無異儀罷渡、無事に商売仕候様ニ、堅以 御朱印旨被 仰下候者、忝可奉仰候事<sup>43)</sup>。

昨年（1590年）南蛮の副王が日葡通交のために勅使を派遣してきた。道理に叶い手順を踏んで、毎年ポルトガル船の渡来と取引が無事に行なわれるよう、朱印状をもって命が下されたら忝い、と。この文中の副王の勅使とは、言うまでもなく、ヴァリニャーノが副王親書を持って来たことを指す。秀吉としては、このポルトガル船積載金取引の一件と副王使節への対応とを、切り離して扱うわけにはいかない羽目になったと言える。

上記の如き愁訴を受けた秀吉は、奉行両名の不手際を怒り、カピタン・モール宛て次の朱印状（〔天正一十九年〕八月九日〔1591年9月26日〕付け）を与えた。

南蛮黒船至長崎着岸之処ニ、彼津下代非分儀申懸、及迷惑之由、以一書申上候、則彼不相届下代、一々御成敗之儀被仰出候、印子ニ不限、何之物成とも可致商売候、重而不寄少之儀、不相届者於有之者、可申上候、速可被仰付候、猶黒田勘解由〔孝高〕、長束大蔵大輔〔正家〕可申候也  
八月九日 御朱印

加美丹

黒船中

44)

インド副王に宛て前記の如き返書案文を起草した直後に、秀吉の奉行人によるポルトガル船積載金買占めをめぐる彼我の間に対立が生じ、秀吉はポルトガル側からの愁訴に応じて、彼らに好意的な朱印状を下付している。ポルトガル人に非義を働いた奉行を処罰することを約し、今後如何なる商品

であれ、押買いなどの不屈きな振舞いに及ぶ者がいたら、申し出るようにという趣旨である。キリシタンには厳しい姿勢で臨んだ秀吉も、ことポルトガル貿易に関しては細心の配慮を傾注して、その障害を排除しようとしたことが分かる。副王への返書案文を書き改める件が話題に上っていたところへ、金取引をめぐる訴訟が持ち上がったことは、イエズス会側の立場を有利にしたのは間違いない。

この一件は詰る所、権力を持った秀吉の奉行人が押買いを強行しようとしたのに対し、ポルトガル側が抵抗したことに尽きるが、ポルトガル人は押買いの不条理なる所以を訴えるのに、彼我の間の取引交渉には、イエズス会パードレの介在が必要であるにも拘らず、奉行人がこれを排除して直接交渉をしようとしたという点を強調した。このポルトガル側の言い分は、長崎貿易の現実を踏まえたもので、新たな要求では決してない。要するに従来通りの仕法で今回、そして今後も取引を続けたいと言うに過ぎない。秀吉がこのポルトガル側の要求に基本的に応じたこと自体、イエズス会宣教師の日本滞在を黙認したことを意味する。事実秀吉はイエズス会側の要請に応じて、返書案文を手直ししただけでなく、パードレ一〇人の滞在を容認した。このパードレたちの滞日を容認する過程で、秀吉やその側近から「使節随員一〇人」<sup>45)</sup>、「人質として」<sup>46)</sup>(副王使節は偽物ではないかとの疑惑があったので)、「貿易の仲介者として」或いは「貿易を断絶させないための人質として」<sup>47)</sup>、「商人として」<sup>48)</sup>等、その資格をめぐるいろいろな発言があったか、またはイエズス会士がそのような了解した旨史料に見える。だが名目がどうであれ、パードレの日本滞在がここで容認されたことはやはり特筆すべきであろう。

\* \* \*

さてイエズス会士の尽力により一部書き替えられた、秀吉の副王宛て返書の文面であるが、日本文では恐らく伝存せず、1592年度イエズス会日本年報にカスティリヤ語訳文<sup>49)</sup>、フロイス著『日本史』にポルトガル語訳文<sup>50)</sup>のみが伝わる。このカスティリヤ語訳とポルトガル語訳は略正確に一致する。以下これを日本語に重訳してみる(一)～(三)による区分は引用者が行なった)。

(一) 非常に遠隔の地から閣下が私に送って来た書翰を落掌した。これを披いて読む時私には、海陸何千レグワも隔たった所を、あたかも眼前に見る如く思われる。その書翰で閣下が述べる如く、この日本王国は六〇以上の領国・領地を包含し、そこにおいて過去久しい間大乱と戦争が絶えず、ほとんど平穏と平和がなかった。というのは邪悪非道の徒が大勢結託して反逆を企て、国王〔天皇〕の命に服そうとしなかったからである。このため私は若い盛りの頃、絶えずこれを悲しみ悩んだ。はるか以前から私は、これらの徒を服従させ、諸国を善く統治するための、驚異的にして重要な方策を熟慮してきたが、それは私自身が三つの徳に基づくということであった。すなわち人と交わる際の親愛の誼、物事を判断する際の慎重なる配慮、および勇氣ある努力と剛志である。これら〔三徳〕をもって私は当〔日本〕諸国全土を服従させ、そして現在統治している。土地を切り拓くために働いている農民たちを憐れんで、彼らに恩恵を施し、人民を正しく威圧し処罰する。これにより、私は当〔日本の〕諸国に平和と平穏とを回復した。僅かな年月の間に君主国日本は統一し、モナルキア・デ・ジャパン揺るぎなき大なる磐石の如く強固にして不動なものとなった。かくして、諸外国および遠隔の諸地域からも自ら帰服し、服従した。これにより今や当〔日本〕諸国は四方ことごとく、我が賢明なる支配者である国王陛下に服従している。私はその命により、良きカピタン將軍たるの権力を行使し、またその旨表明した。それ故当〔日本〕諸国全土がすべて彼〔天皇〕に従っている。私は邪悪非道の徒を殺し、海陸の盜賊を除き、この諸国全土に亘って地域・家族・人民を安穩に過させている。それ故今や人民は、泰平の極みを享受している。また私は是非とも、シナ王国に遠征してこれを奪取しようと決意した。日ならずして私はかの国へ渡海しようと思う。これを意のままに征服しうることを私は疑わない。それ故、私は貴国にさらに接近するので、交

誼の便は一層多くなることであろう。

(二) パードレたちについてであるが、当日本王国は神々<sup>カミス</sup>の国であり、われわれはこの神々<sup>シン</sup>は心と同じものだと信ずる。つまり万物の起源である。心はすなわち万物の実体にして真の存在である。それ故万物はこの心と同じであり、これに帰結する。シナにおいてはこれを儒道<sup>ジュトウ</sup>と言い、天竺<sup>テン</sup>では仏法と称する。日本の礼讓<sup>レイジョウ</sup>と治政はすべて、この神々の法に服することに存する。この礼讓が守られないと、君臣の別が分からない。これに反して〔礼讓が〕守られるならば、君臣・父子・夫婦の間に存在すべき和が全うされる。このため〔日本の〕人民と王国の内政・外政は、この和と礼讓の遵守の内に存する。

(三) 伴天連たちは先年、人々を救う別の法を教えるために当王国に渡来した。しかしわれわれにはこの神々の道が確立しているので、他の法を望む必要がない。というのは、人民が説や法をいろいろ替えるのは、当王国にとって有害なことだからである。この理由により私は、パードレたちに日本退去を命じた。そしてこの法を弘めることと、今後何人たりと新しい法を説くために当地に渡来することを禁じた。しかしながら、われわれの間に通交を持つことは、私も望んでいる。閣下の方でもそれを望むなら、当王国は海陸ともに盗賊は掃蕩せられ、その障害はない。商品を持って来る者には私は、何人の妨害も受けることなく、渡来してすべて自由に売る許可を与える。閣下は以上のことを嘉納し、これを諒解されたい。

南の御地より、〔閣下が〕進物として私に送った品々を受納した。書翰の中で〔閣下が〕私に述べることも併せ、そのすべてを私はうれしく思った。私は当〔日本〕諸国からの品物を送り、品物とそれを作った者の名を認めた別紙の目録を添える。余事は使節から〔閣下に〕伝えてもらえるよう彼に依頼する。それ故ここで筆を擱く。天正二〇年第七の月の二五日に認める。末尾に彼の印と署名<sup>51)</sup>がある。

これがイエズス会士の要請に応じて一部改めた文面（の重訳）である。先ず日付の点に触れる。文面の修正が行なわれた時期については、1591年10月9日付け長崎発ヴァリニャーノのイエズス会本部宛て書翰には、パードレ・オルガンティーノとイルマン・ジョアン・ロドリーゲスが京都から送って来た、同年9月6日付けおよび9月23日付け書翰（各人二通ずつで、合計四通）を受け取り、それらによって副王親書への対応に関する事態の新たな展開を知ることが出来たとして、次のように見える。京都所司代前田玄以が秀吉の有力側近である許りか、以前から教会に好意的であったことを記した文に続く。「彼〔前田玄以〕はまた、関白殿が既に副王に宛て認めてしまっていた書翰を、書き替えさせる役を担当した。そしてその写しをイルマン〔ジョアン・ロドリーゲス〕の許に届けさせ、どこを削除すべきと思うかなど彼と検討した。』<sup>52)</sup>

書き替える前の返書案文は天正一九年七月二五日（1591年9月12日）付けである。従って上に見える如くヴァリニャーノが、返書書替えの作業が進行していることを知ったのは、京都にいる仲間から受け取った9月6日付けと9月23日付けの書翰の内、9月23日付けの手紙によってであったということになる。つまり返書案文が作成されて、直ぐに在京イエズス会士にその文面が伝えられ、その激しいキリシタン排撃の件に困惑した宣教師が直ちに、前田玄以等を介して秀吉に対しその書替えを懇願し、秀吉も直ぐにそれに応じたという経緯が判明する。しかもその文面の修正の過程で、イエズス会側の意向を汲んで文章が作られたことも分かる。返書の書替えが何時終わったかは、上記の書翰では不詳であるが、9月23日以後もある期間その作業が続けられ、最終的に文面が確定したと言ってよいであろう。1592年2月15日付け長崎発ヴァリニャーノの総長宛て書翰に次のように見える。

〔関白殿は〕京都所司代であり、非常に重立った自分の側近である一人の異教徒の領主〔前田玄以〕——彼はわれわれに関する諸々の事柄に好意を抱いていた——を介し神によって心を動かされ、既に彼が認めて印を捺してしまっていた次のような文面の副王宛ての書翰を書き替えた。その文面とはすなわち、パードレたちが悪魔の邪悪な法を日本において説教し、神や仏を破壊したので、彼らを日本から追放した。もしも何人かが当地にやって来たら必ず殺す、というものであった。そして非常によく礼儀に叶い、鄭重な別の書翰を彼〔副王〕に宛て認めた。それ許りでなく、私の同伴者のパードレの内の一〇人を、われらが法を日本人に説いたり、改宗させたりはしないとの条件付きで、副王との間で行なうことを望んでいる貿易の仲介者の役を果たすために、長崎の教会とカーザに留まることを命ずることまでした。<sup>53)</sup>

ヴァリニャーノがこの書翰を長崎で記した時には、在京の仲間からの通信で、一部修正されて確定した返書（つまりカスティリャ語訳・ポルトガル語訳で伝存する返書）の文面を既に知っていたことが分かる。その修正済み返書の日付は、天正二〇年七月二五日（1592年9月1日）である。つまりこの日付は実際に文章が確定し、認められた時期よりもかなり遅れていることは明らかで、七月二五日が修正前の案文の日付と同じであるから、それをそのまま生かして、年だけを天正一九年から同二〇年に改めたのであろう。

次に肝心の文面であるが、漢文で書かれた前引の案文と対比することにより、どこが書き替えられたかが明確になる。要するに（一）（二）については、両文書とも略同文である。異同があったとしても、それは翻訳上いわば止むを得ない程度のもものと認定してよい。しかしこれが（三）になると、両者の間の異同は大きい。（三）はキリシタン禁止とポルトガル貿易許可の二つの内容から成る。この内両文書間に大きな違いがあるのは、キリシタン禁止に関する文章である。ポルトガル貿易許可の件は、略同文である。つまり修正前の案文（漢文）と修正後の文面（カスティリャ語・ポルトガル語訳文）との間の異同箇所は、（三）のキリシタン禁止の件に尽きると言ってもよい。キリシタン禁止の趣旨は同じであるが、かなり穏やかな表現に改められている。禁教令そのものの撤廃は到底無理な話で、ヴァリニャーノが前引の書翰で言う「非常に礼儀に叶い鄭重な」文面に替わったことで、イエズス会側としては一応満足せざるを得なかったのであろう。

## 七

先に記した通り、今回のインド副王使節来訪をめぐる秀吉の対ポルトガル外交は、折から朝鮮・琉球・フィリピン・台湾といった近隣諸国に対して展開した、秀吉の外政の一環として行なわれた。しかしインド副王への返書には、一、それを送付した事情の面でも、二、文面の点でも、他の諸国に対する場合とは違う特異性があると言ってもよい。すなわち一については、他の諸国とは異なり、これはインド副王の方から秀吉に宛て書翰が送られてきたのに対する返書である。二は、入貢を要求する文言が見えない点が、他と際立った相違点である<sup>54)</sup>。

一と二は関連していると言うべきであろう。つまり秀吉が近隣諸国に対して、自ら積極的に外政を展開したのに対し、インド副王に返書を送ったのはいわば受身の姿勢とも言える。他の諸国に対するように、自ら進んで書翰を送ったわけではない。副王の方から、キリシタン宣教師を保護してほしいという趣旨の書翰が寄せられたから、この件に関する自分の見解を表明したのである。このような書翰送付の事情を考えれば、そこに入貢の要求が見えないのも、異とするに足りない。しかし国内統一を成就した自己の強さを誇示し、神国日本を高らかに謳い、神儒仏の正法をキリシタンの邪法に相對峙させ、宣教師の渡来を激しい言葉で禁じたのであるから（特に修正前の案文）、そこに入貢要求の



件が記されていても、文脈上不整合とは決して言えない。それがこのインド副王宛て返書にのみ見えないのはやはり、一件傍若無人の強硬外交を展開したようであり、それなりに細心に立案された外政の所産であったとも言えよう。

天正二〇年（1592年）六月三日付けで秀吉が、朝鮮出兵中の諸大名に宛て書き送った証明のための檄文には、次の如き文言が見える。「如汝等者、将数十万之軍卒、可誅伐如処女大明国、可如山庄卵者也、匪畜大明、況亦天竺南蛮可如此」<sup>55)</sup>。朝鮮在陣の兵力は〈数十万〉に上り、処女の如き明を誅伐するのは、山が卵を潰すようなものだ。それは明だけでなく、天竺・南蛮も同様だと言う。この〈南蛮〉が何処を指すかは明かではないが、天竺（インド）と並べて記しているのであるから、スペイン領フィリピンではないであろう。仮に〈南蛮〉に、ゴアのインド副王の領国が含まれるとしても、上記の件は明の次は天竺・南蛮を……との具体的展望を表明したのではなく、単なる将兵鼓舞の類であろう。ポルトガルに対する秀吉の真意はあくまでも、キリシタン布教の禁と貿易奨励の二点に尽きると言うべきであろう。

インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスによる秀吉への遣使は、途中キリシタン禁令発布の報せが伝わったことにより、これを機に秀吉の教会への姿勢を軟化させよう、あわよくば禁令を撤廃させたい、との思惑が伴ったことは初めに記した。時を同じくして、秀吉の奉行がポルトガル船積載金の押買いを図りながら、先方の強い抵抗に遭って妥協を強いられる事件が起こったことは、やはりイエズス会側に有利に作用したと言ってよい。ポルトガル貿易を手放したくない、との秀吉の意向は一貫している。伴天連は追放するがポルトガル貿易は継続しよう、という伴天連追放令の趣旨の貫徹は難しいということが、改めて思い知らされたわけである。禁教令の撤廃は無理な要求として、秀吉の外交文書にしては穏やかな文面の返書を受け、しかも条件付きながら宣教師の日本滞在を容認させたのであるから、結果的に今回の遣使は教会にとって、一応の成果を上げ得たと評してよいのではないであろうか。

#### Notas (註):

- 1) C. R. Boxer, "A Portuguese Embassy to Japan (1644-1647)" London, 1928. C. R. Boxer, "The Embassy of Captain Gonçalo Siqueira de Sousa to Japan in 1644-1647", Macau, 1938.
- 2) *Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus que andão nos Reynos de Japão escreverão aos da mesma Companhia da Índia e Europa*, Coimbra, 1570, ff. 121,121v., 280-281. *Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus escreverão dos reynos de Japão & China, aos da mesma Companhia da Índia & Europa*, I, Évora, 1598, ff. 42v., 94v., 95. 村上直次郎訳註『異国往復書簡集 増訂異国日記抄』駿南社, 1929年, 4・5・11~13頁。
- 3) *Ibid.*, f.137v. 村上直次郎訳註, 同上書, 14・15頁。
- 4) J. A. Abranches Pinto, Okamoto Yoshitomo, Henri Bernard (eds.), *La Première Ambassade du Japon en Europe 1582-1590*, Tôkyô, 1942, p.91. ルイス・フロイス原著, 岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記』東洋堂, 1942年, 191・192頁。
- 5) *Ibid.*, pp.91-92. 同上書, 192・193頁。
- 6) *Cartas*, Coimbra, 1570, f. 331,331v.

Além das cartas apresentadas, conhecemos através das várias fontes históricas que se trocavam umas cartas entre os daimiões do Oeste do Japão e o rei de Portugal ou o vice-rei da Índia, mas essas não são legadas a nós. Cito alguns exemplos.

Segundo a carta de Francisco Xavier enviada de Cochim, a 29 de Janeiro de 1552, Vôdomo Yoxixighe (大友義鎮), quando saiu Xavier do Japão em 1551, escreveu uma carta ao rei de Portugal (G. Schurhammer et I. Wicki, *Epistolae S. Francisci Xaverii*, II, Romae, 1945, p.273).

Segundo a obra do padre Luís Fróis e a carta do padre Pedro de Alcávea enviada de Goa em 1554, Vôdomo

Yoxixighe, quando saiu Xavier do Japão em 1551, escreveu uma carta ao vice-rei (Luís Fróis, *Historia de Japam*, J. Wicki (ed.), I, Lisboa, 1976, p.45. *Cartas*, Coimbra, 1570, f. 64. *Cartas*, I, Évora, 1598, f. 23v.).

Segundo a citada carta do padre Pedro de Alcávea em 1554, Vôdomo Yoxixighe enviou mais uma carta ao vice-rei em Fevereiro de 1553 (*Cartas*, Coimbra, 1570, f. 66. *Cartas*, I, Évora, 1598, f. 24). A carta do padre Nunes Barreto a Ignatius Loyola enviada da povoação chamada Mari situada entre Goa e Cochim em Maio de 1554 diz que a dita carta de Yoxixighe foi escrita (mais provavelmente, foi levada à Índia) em Abril de 1554 (I. Wicki, *Documenta Indica*, III, Romae, 1954, p.79).

A citada carta do padre Nunes Barreto diz que Vôvchi Yoxinaga (大内義長), irmão mais novo de Vôdomo Yoxixighe, escreveu uma carta ao vice-rei da Índia (mais provavelmente, fez chegar a Goa) em Abril de 1554 (*Documenta Indica*, III, p.79).

A citada carta do padre Nunes Barreto diz que o rei de Firado Matçura Tacanobu (松浦隆信) escreveu uma carta ao vice-rei da Índia (mais provavelmente, fez chegar a Goa) em Abril de 1554 (*Documenta Indica*, III, p.79).

Segundo a carta do padre Pedro de Alcávea enviada de Goa em 1554, o vice-rei da Índia enviou uma carta a Vôdomo Yoxixighe. A carta do padre Alcávea diz: “[em Fevereiro de 1553 Vôdomo Yoxixighe] escreveo ao Visorei da Índia, em que lhe dava os agardcimentos [sic.] do que lhe mandara” (*Cartas*, Coimbra, 1570, f. 66. *Cartas*, I, Évora, 1598, f. 24) e não esclarece directamente se o vice-rei enviou-lhe uma carta ou não, mas pressuponho isso como verdade por enquanto.

Como já mencionei, o conteúdo das cartas assim trocadas entre as duas partes, de vez em quando, fica claro só parcialmente através das fontes acima citadas. Em todo o caso, porém, não conhecemos o texto nem o conteúdo dessas. Por conseguinte teríamos de evitar determinar o caráter dessas cartas, mas, falando de um modo geral, se poderia afirmar que se tratam de cartas cerimoniais e cortesãs sem nenhum conteúdo essencial. (Acerca deste intercâmbio entre os daimiō e as autoridades portuguesas, consultei Okamoto Yoshitomo, “Tenmon-Eiroku nenkan ni okeru Saigoku-Shokō no Indo-Kōtsū” in *Nippo Kōtsū*, I, Sociedade Luso-Japonesa, 1929.)

この他、次の如く西国の諸大名とポルトガル国王・インド副王との間で書翰のやり取りのあったことが、様々な史料から判明するが、しかしこれらは書翰の本文が伝存していない。

大友義鎮は1551年ザビエルが日本を去る際、ポルトガル国王宛て書翰を認めた (1552年1月29日付けコチン発ザビエルの書翰に、その旨記されている。G. Schurhammer et I. Wicki, *Epistolae S. Francisci Xaverii*, II, Romae, 1945, p. 273. 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社, 1985年, 539頁)。

大友義鎮は1551年ザビエルが日本を去る際、インド副王に書翰を認めた (Luís Fróis, *Historia de Japam*, J. Wicki (ed.), I, Lisboa, 1976, p.45. 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』6, 中央公論社, 1978年, 70頁。および1554年ゴア発ペドロ・デ・アルカセヴァの書翰に、その旨が見える。 *Cartas*, Coimbra, 1570, f. 64. *Cartas*, I, Évora, 1598, f.23v. 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上, 雄松堂, 1968年, 44頁)。

大友義鎮は再度インド副王に書翰を書き送った (1554年ゴア発ペドロ・デ・アルカセヴァの書翰によると、義鎮は1553年2月にこの書翰を認めたという。 *Cartas*, Coimbra, 1570, f. 66. *Cartas*, I, Évora, 1598, f.24. 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上, 46頁。1554年5月ゴアとコチンの間のマリからヌネス・バレットがロヨラに書き送った書翰に、去る4月、つまり1554年4月に認めた旨見える。1554年4月にインドに到着したという意味であろう。I. Wicki, *Documenta Indica*, III, Romae, 1954, p.79)。

大内義長はインド副王に書翰を書き送った (同上バレットの書翰に、同じく去る4月つまり1554年4月に認めた旨見える。1554年4月にインドに到着したという意味であろう。 *Documenta Indica*, III, p.79)。

松浦隆信はインド副王に書翰を書き送った (同上バレットの書翰に、同様に去る4月、つまり1554年4月に認めた旨見える。1554年4月にインドに到着したという意味であろう。 *Documenta Indica*, III, p.79)。

インド副王は大友義鎮に書翰を送った (1554年ゴア発ペドロ・デ・アルカセヴァの書翰に拠るが、この書翰の文面には「[1553年2月大友は] インド副王に書き送り、[副王が] 彼に送ってきたものに謝辞を述べた。」と見え (*Cartas*, Coimbra, 1570, f. 66. *Cartas*, I, Évora, 1598, f.24. 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上, 46・47頁), 副王が書翰を送ってきたとは明記していないが、そのように解釈しておく。

先に記した通り、ここに挙げた西国諸大名とポルトガル国王・インド副王との間で交わされた書翰は、引用した諸史料からそれらの書翰の内容が断片的に判明することはあるが、とにかくその本文は伝わっていない。したがって、どのような内容が書き送られたかは確言は避けねばならないが、しかしおしなべて、然したる具体的課題のない挨拶状だと

言っただけであろう。(なおこの西国諸大名とポルトガル側との間の書翰のやり取りについては、岡本良知「天文永禄年間に於ける西国諸侯の印度交通」『日葡交通』第一輯、日葡協会、1929年を参照した。)

- 7) O texto original da carta do vice-rei (patrimônio nacional do Japão) encontra-se conservado no Templo Myōhōin (妙法院), Kyōto. A fotografia da carta é publicada em Murakami Naojirō (村上直次郎) (tra.), *Ikoku Ōfuku Shokan-shū : Zōtei Ikoku Nikki-shō* (『異国往復書簡集 増訂異国日記抄』), Shunnansha (駿南社), 1929, pp.24-25 e em vários outros livros. A sua tradução japonesa é publicada em Shinmura Izuru (新村出), “Indo-fukuō yori Toyotomi Hideyoshi ni okutta shojō”(「印度副王より豊臣秀吉に送った書状」) in *Namban Kōki* (『南蛮広記』), Iwanami Shoten (岩波書店), 1925, pp.49-51 e em outros livros.  
副王親書の原文書(国宝)は京都の妙法院に所蔵されている。その写真は村上直次郎訳註『異国往復書簡集 増訂異国日記抄』24～25頁その他の文献に掲載されている。邦訳文は新村出「印度副王より豊臣秀吉に送った書状」(『南蛮広記』岩波書店、1925年)49～51頁ほか、多くの文献に記載されている。
- 8) J. F. Schütte, *Monumenta Historica Japoniae*, I, Romae, 1975, p.1318.
- 9) Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap. Sin. 11-I, ff.80,80v.
- 10) Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no Kenkyū* (『キリシタン時代の研究』), Iwanami Shoten, 1977, pp.122-124.  
高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店、1977年、122～124頁。
- 11) Jap.Sin. 11-II, ff.226,226v.
- 12) Tōkyō Daigaku Shiryō Hensan-jo (東京大学史料編纂所), *Shiryō Sōran* (『史料綜覧』), XII, 1982, pp.271-308.  
東京大学史料編纂所『史料綜覧』一二、1982年、271～308頁。
- 13) *Ibid.*, p.297.  
『史料綜覧』一二、297頁。
- 14) Luís Fróis, *Historia de Japam*, J. Wicki (ed.), V, Lisboa, 1984, pp. 270,279,288.  
ルイス・フロイス原著、アンリー・ベルナル、アブランシエス・ピント、岡本良知編訳『九州三侯遣欧使節行記 続編』東洋堂、1949年、118・138・139・141頁。松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2、中央公論社、1977年、50・62・64・76頁。
- 15) J. F. Shütte, *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia*, Romae, 1968, p.1025.
- 16) *Shiryō Sōran*, XII, p.324.  
『史料綜覧』一二、324頁。
- 17) Fróis, *op. cit.*, pp. 270-326, 366-381. フロイス原著、前掲書続編、118～208頁。松田・川崎訳、前掲書、2、50～159頁、松田・川崎訳、前掲書、5、282～291頁。
- 18) *Ibid.*, p.271. フロイス原著、前掲書続編、119頁。松田・川崎訳、前掲書、2、51頁。
- 19) Hubert Cieslik, “Keichō-nenkan ni okeru Hakata no Kirishitan” (「慶長年間における博多のキリシタン」) in *Kirishitan Kenkyū* (『キリシタン研究』), XIX, Yoshikawa Kōbunkan, 1979, p.9.  
フーベルト・チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」『キリシタン研究』第一九輯、吉川弘文館、1979年、9頁。
- 20) Segundo a carta de Valignano ao Padre Geral da Companhia de Jesus datada a 12 de Outubro de 1590 (Jap. Sin. 11-II, f.233v.), Asano Nagamasa e Curoda Yoxitaca intercederam junto de Fideyoxi a favor dos jesuítas.  
1590年10月12日付けヴァリニャーノのイエズス会総長宛て書翰にも、浅野長政と黒田孝高とが教会のために秀吉への執り成しをしたことが見える (Jap. Sin. 11-II, f.233v. 高瀬弘一郎訳『イエズス会と日本』一、岩波書店、1981年、78頁)。
- 21) Fróis, *op.cit.*, pp.271, 298, 299. フロイス原著、前掲書続編、119,161頁。松田・川崎訳、前掲書、2、51,94頁。
- 22) *Ibid.*, p.270. フロイス原著、前掲書続編、118,119頁。松田・川崎訳、前掲書、2、50頁。
- 23) Iwazawa Yoshihiko (岩沢愿彦), “Hideyoshi no Karairi ni kansuru monjo” (「秀吉の唐入りに関する文書」) in *Nihon Rekishi* (『日本歴史』) 163, pp.73-75.  
岩沢愿彦「秀吉の唐入りに関する文書」『日本歴史』一六三、73～75頁。
- 24) *Segunda Parte das Cartas de Japão que escreverão os Padres & Irmãos da Companhia de Jesus*, Évora, 1598, f.176v.  
村上直次郎訳註『耶蘇会の日本年報』二、拓文堂、1944年、209頁。
- 25) Takeda Katsuzō (武田勝蔵), “Hakushaku Sō-ke shōzō Hōkō-monjo to Chōsen-jin”(「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣」) in *Shigaku* (『史学』), IV-3, pp.76-99. Ikeuchi Hiroshi (池内宏), *Bunroku-Keichō-no-eki* (『文禄慶長の役』),

- tomo principal, vol.I, Yoshikawa Kōbunkan (吉川弘文館), 1987, pp.137-232. Nakamura Hidetaka (中村榮孝), *Nissen Kankei-shi no Kenkyū* (『日鮮関係史の研究』), vol.II, Yoshikawa Kōbunkan, 1969, pp.84-103, 241-255. Miyake Hidetoshi (三宅英利), *Kinsei Nitchō Kankei-shi no Kenkyū* (『近世日朝関係史の研究』), Bunken Shuppan (文献出版), 1986, pp.127-132. *Shiryō Sōran*, XII, pp.301-343.
- 武田勝蔵「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣」『史学』四ノ三, 76~99頁。池内 宏『文禄慶長の役』正編第一, 吉川弘文館, 1987年, 137~232頁。中村榮孝『日鮮関係史の研究』中, 吉川弘文館, 1969年, 84~103, 241~255頁。三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版, 1986年, 127~132頁。『史料綜覧』一二, 301~343頁。
- 26) Kamiya Nobuyuki (紙屋敦之), *Bakuhau-sei-kokka no Ryūkyū-shihai* (『幕藩制国家の琉球支配』), Azekura Shobō (校倉書房), 1990, pp.20-22. *Shiryō Sōran*, XII, pp.212-335.
- 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房, 1990年, 20~22頁。『史料綜覧』一二, 212~335頁。
- 27) Murakami (tra.), *op.cit.*, pp.29-82. Murakami Naojirō, *Nippon to Firippin* (『日本と比律賓』), Asahi Shimbun-sha (朝日新聞社), 1945, pp.13-18, 126-128. Matsuda Kiichi (松田毅一), *Kinsei-shoki Nihon-kankei-namban-shiryō no Kenkyū* (『近世初期日本関係南蛮史料の研究』), Kazama Shobō (風間書房), 1967, pp.1020,1021. Iwao Seiichi (岩生成一), “Bunroku-ninen (1593) Ruson-chōkan ate Toyotomi Hideyoshi no shokan ni tsuite”(「文禄二年(1593)呂宋長官あて豊臣秀吉の書翰について」) in *Komonjo Kenkyū* (『古文書研究』), XXV, pp.4-7.
- 村上直次郎訳註『異国往復書簡集 増訂異国日記抄』29~82頁。村上直次郎『日本と比律賓』朝日新聞社, 1945年, 13~18, 126~128頁。松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房, 1967年, 1020,1021頁。岩生成一「文禄二年(1593)呂宋長官あて豊臣秀吉の書翰について」『古文書研究』二五, 4~7頁。
- 28) Maeda Sonkeikaku Bunko (前田尊経閣文庫). Iwao, loc.cit., p.5. Murakami (tra.), *op.cit.*, pp.68,69.
- 前田尊経閣文庫。岩生, 同上論文, 5頁。村上直次郎訳註『異国往復書簡集 増訂異国日記抄』68,69頁。
- 29) Iwao, loc.cit., pp.10-12.
- 岩生, 同上論文, 10~12頁。
- 30) Fróis, *op. cit.*, pp. 297-320. フロイス原著, 前掲書続編, 158~204頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 92~131頁。
- 31) *Ibid.*, p. 309. フロイス原著, 前掲書続編, 176頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 108頁。
- 32) *Ibid.*, p.318. フロイス原著, 前掲書続編, 199頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 127頁。
- 33) *Ibid.*, p.289. フロイス原著, 前掲書続編, 144頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 78,79頁。
- 34) Carta de Valignano, de Nagasaki ao Padre Geral da Companhia de Jesus, datada a 9 de Outubro de 1591 (Jap. Sin. 11-II, f. 250v.). Yanagida Toshio (柳田利夫), “Toyotomi Hideyoshi Indo-fukuō-ate-shokan-anmon ni tsuite: Ōbun-genshiryō to hikaku shite”(「豊臣秀吉インド副王宛書簡案文について——欧文原史料と比較して」) in *Biblia* (『ビブリア』), 88, p.53. Fróis, *op.cit.*, p.368.
- 1591年10月9日付け長崎発ヴァリニャーノのイエズス会総長宛て書翰 (Jap. Sin. 11-II, f. 250v.). 柳田利夫「豊臣秀吉インド副王宛書簡案文について——欧文原史料と比較して」『ビブリア』八八, 53頁。Fróis, *op.cit.*, p.368. フロイス原著, 前掲書続編, 241頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 135頁。
- 35) Tsuji Zennosuke (辻善之助) (ed.), *Rokuon-Nichiroku* (『鹿苑日録』), III, Zoku-Gunsho-Ruijū-Kansei-kai (続群書類従完成会), 1961, p.16.
- 辻善之助編『鹿苑日録』三, 続群書類従完成会, 1961年, 16頁。
- 36) *Ibid.*, p.17. 『鹿苑日録』三, 17頁。
- 37) Segundo julga Matsuda Kiichi, uma das várias catanas, hoje existentes na Real Armería em Madrid, seria a espada comprida de Cunifusa ou a espada de cinta de Mitçutada oferecida por Fideyoxi ao vice-rei da Índia. Ver Matsuda, *op.cit.*, pp.993,994.
- 今日マドリードの王宮武器庫に保管されている日本刀の一振が, この時秀吉からインド副王に贈られた国房の太刀か光忠の腰剣であろうという。松田, 前掲書, 993,994頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 159頁。
- 38) Igualmente segundo julga Matsuda Kiichi, duas das armaduras existentes na Real Armería em Madrid seriam presentes oferecidos por Fideyoxi ao vice-rei. Ver *ibid.*, pp.983-992.
- 同じく王宮武器庫に保管されている日本の甲冑四領の内の二領が, この時秀吉からインド副王への贈答品だという。松田, 前掲書, 983~992頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 158頁。
- 39) *Tenri Toshokan Zenpon Sōsho*: Komonjo-hen (『天理図書館善本叢書 古文書編』), Tenri Daigaku Shuppan-bu (天理大学出版部), 1986, pp.295-298. Consulte ainda Ikeuchi, *op.cit.*, pp.130,131; Tsuji Zennosuke, *Zōtei Kaigai Kōtsū*

*Shiwa* (『増訂海外交通史話』), Naigai Shoseki (内外書籍), 1933, pp.423-425; Murakami Naojirō, *Nagasaki-shishi: Tsūkō-Bōeki-hen Seiyō-shokoku-bu* (『長崎市史 通交貿易編西洋諸国部』), Seibundo (清文堂), 1967, pp.194,195; Kitajima Manji (北島万次), *Toyotomi-Seiken no Taigai-Ninshiki to Chōsen-Shinryaku* (『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』), Azekura Shobō, 1990, pp. 106-108.

『天理図書館善本叢書 古文書編』天理大学出版部, 1986年, 295~298頁。なお池内, 前掲書, 130,131頁。辻善之助『増訂海外交通史話』内外書籍, 1933年, 423~425頁。村上直次郎『長崎市史 通交貿易編西洋諸国部』清文堂, 1967年, 194,195頁。北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房, 1990年, 106~108頁を参照した。

- 40) Jap. Sin. 11-II, ff. 244v, 245. Yanagida, loc.cit., pp.48,49.  
Jap. Sin. 11-II, ff. 244v, 245. 柳田, 前掲論文, 48,49 頁。
- 41) Jap. Sin. 11-II, f. 250v. Yanagida, loc.cit., pp.56. Fróis, *op.cit.*, pp.366-371.  
Jap. Sin. 11-II, f. 250v. 柳田, 前掲論文, 56 頁。Fróis, *op.cit.*, pp.366-371. フロイス原著, 前掲書続編, 238~246 頁。  
松田・川崎訳, 前掲書, 2, 132~140 頁。
- 42) *Sagaken Shiryō Shūsei: Komonjo-hen* (『佐賀県史料集成 古文書編』), III, 1958, pp. 282,283.  
『佐賀県史料集成 古文書編』三, 1958年, 282,283頁。
- 43) *Ibid.*, p.284.  
同上書, 284頁。
- 44) *Ibid.*, pp.284,285. Jap. Sin. 51, ff. 334v- 337. Fróis, *op.cit.*, pp.355-358.  
同上書, 284,285頁。Jap. Sin. 51, ff. 334v- 337. Fróis, *op.cit.*, pp.355-358. 松田・川崎訳, 前掲書, 12, 100~105頁。
- 45) Fróis, *op.cit.*, p.372. フロイス原著, 前掲書続編, 248頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 141,142頁。
- 46) *Ibid.*, p.371. フロイス原著, 前掲書続編, 247頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 140頁。
- 47) Jap. Sin. 11-II, f. 283. Yanagida, loc.cit., p.58.  
Jap. Sin. 11-II, f. 283. 柳田, 前掲論文, 58 頁。
- 48) Jap. Sin. 11-II, f. 250,250v. Yanagida, loc.cit., p.55.  
Jap. Sin. 11-II, f. 250,250v. 柳田, 前掲論文, 55 頁。
- 49) Jap. Sin. 51, f. 344,344v.
- 50) Fróis, *op.cit.*, pp.375-377. フロイス原著, 前掲書続編, 253~255 頁。松田・川崎訳, 前掲書, 2, 147~149頁。
- 51) Não há palavra portuguesa que se iguala àquela castelhana “firma” em Fróis, *op.cit.*, p.377.  
Fróis, *op.cit.*, p.377 には「署名」の語がない。
- 52) Jap. Sin. 11-II, f. 250v. Yanagida, loc.cit., p.56.  
Jap. Sin. 11-II, f. 250v. 柳田, 前掲論文, 56 頁。
- 53) Jap. Sin. 11-II, f. 283. Yanagida, loc.cit., p.58.  
Jap. Sin. 11-II, f. 283. 柳田, 前掲論文, 58 頁。
- 54) Ao comparar os documentos diplomáticos enviados por Fideyoxi aos países vizinhos com o rascunho da carta de resposta ao vice-rei (em chinês), consultei Kitajima, *op.cit.*, pp.98-121.  
近隣諸外国向けの秀吉の外交文書と, 彼がインド副王に送った返書案文(漢文)との対比については, 北島, 前掲書, 98~121頁を参照した。
- 55) *Dai-Nippon Komonjo* (『大日本古文書』), Mōri-ke monjo (毛利家文書之三), III, número 903.  
『大日本古文書』毛利家文書之三, 九〇三号。

## 附録

### 「インド副王ドゥアルテ・デ・メネゼスの豊臣秀吉宛親書」 解題および原文・和訳

高瀬教授が本論に説く通り、インド副王が秀吉へ宛てたこの親書の有する史的意義は、秀吉が副王へしたためた返書に比べればはるかに小さなものであった。が、その内容を一瞥しておくこともまったく無意味とは思われないので、ここで日埜より若干の参考事項を列記しておく。

本状は明治の末に京都の名刹妙法院で発見され、現在に至っている。新村出によれば、慶長・元和の交より「方広寺を管した妙法院に此物が伝わつて居たのは自然な順序であつて、伝来の径路は略々推す事が出来る」（「印度副王より豊臣秀吉に送つた書状」『新村出全集』第五卷、筑摩書房、1971年、101頁）という。

聚楽第でヴァリニャーノから秀吉に捧呈されるに際し、本状は「長さ四パルモ、幅と高さ一パルモ半の箱に収められて」おり、「箱の内側は金（糸）と絹を交ぜた緑色の織物が貼られ、外側はすべて緑のビロードで掩われ、（それに）金（糸）の紐がついており、種々の銀の花模様が見事な調和を保って織り込まれていた」（松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』2、中央公論社、1977年、98頁）という。しかし「惜しい事には、書状を包んであつた一切の物どもも今日には残つて居ない」（新村、前掲論文、101頁）。

書状そのものについてフロイスは「立派な羊皮紙にしたためられ、周縁には彩色の模様があり、黄金の印璽が（それから）垂れ、金（糸）と紫色の絹に（よる）錦（織）の立派な袋に入れてあつた。」と述べる。現存する書状は横約75cm、縦約57cmであるから、書状は前記の箱（長さ約88cm〔四パルモ〕、幅と高さそれぞれ約33cm〔一パルモ半〕）の中に横に二つ折りにして入れてあつた、と見てよい。周縁の彩色の模様および細密画について、少しばかり顔料の剥げ落ちている所が見られるのは、多分そのせいであろうと思われる。しかしながら書面の文字に判読不能なものは全然なく、模様・細密画の極彩色も鮮やかであり、総合的な保存状態は大変に良好であると言ってよい。周縁の細密画については、新村が詳細な考証を加えているので、それに譲る（新村、前掲論文、102～103頁）が、金泥を用いて記された本文の劈頭Cの飾り文字の内側には、秀吉の定紋である桐に擬した紋章が描かれ、その上にこれまた金泥で王冠が描かれているのは、筆者には特に興味深い。秀吉の自尊心に訴えようとする副王の意向なり、そうした飾り文字の使用を勧めたかも知れぬゴア在住の日本人助言者の存在なりが推測されはしないであろうか。

この書状のテキストはルイス・フロイス著『日本史』の中でも紹介されている（Luís Fróis, *Historia de Japam*, V, José Wicki (ed.), Lisboa, 1984, pp.302-303）ものの、奇妙なことに、両者の間には文言・略字法・句読点などにおいて多少の異同がある。もとより副王の親書は、高瀬教授が本論に説くように、特にこれと言って内容のない儀礼的なものであるから、両者を対照することによって書状の趣旨そのものに重大な齟齬・矛盾が生ずることはない。文書の日付であるが、フロイスの記す親書の日付が1587年であるのに対し、原文書のそれは1588年4月である。ただし1588の最後の8は素人の眼にも7を上から修正していることが明白であるゆえ、本状の作成された時期が1587年4月であつたことには、ほとんど疑いを容れない。

四人の天正少年使節は1587年5月29日にゴアに着き、翌1588年4月22日にゴアをヴァリニャーノとともに出発、結局マカオにおいて1590年6月までの長期滞在を余儀なくされた、という事情から、ヴァリニャーノは、使節の少年たちをゴアに迎える少し前に秀吉宛の書状を副王にしたためてもらつていたことになる。

1587年4月の時点では秀吉による伴天連追放令はまだ発布されていなかったが、前記のような次第で日本への出発が大幅に遅れたため、さらには、この使節が伴天連追放令の発布を敢えて承知した上で遣わされるものであることを強調するため、おそらくはヴァリニャーノ自身の指示により、1587年の最後の7を8と書き直すような改竄が行なわれたのであろうと思う。

この書状の和訳としては古く新村，前掲論文に所載されたものが知られてきた。碩学の筆になる格調の高い名訳であることは勿論であるが、この論文が発表されたのは明治四四年（1911年）年六月刊行の『藝文』誌上であるから、現在の文体意識からはいささか古色蒼然たる印象を免れないし、解釈上も、巡察師ヴァリニャーノが「其地〔日本〕を知悉せるを以て」と訳された箇所は、拙訳の通り、「〔ヴァリニャーノは〕貴国においてすでに知られてもいるので」の誤解であるので、ここに蛇足ながら日埜の作成した和訳を原文と共に掲載させていただく。

## Ao mui alto e poderoso quambacudono Dom Duarte Visorrei da India

Como quer que polla distancia das terras não ouue ate gora entre nos cõmunicaçaõ todauia pollas cartas dos Padres que estaõ nesses reinos de V. A. soube a grandeza de suas uitorias, e obras, e a fama, & nome, ã ainda nas partes, que estaõ mui longe se ouue de Vossa Alteza e como sugeitou a seu imperio os mais snorês\*), e reinos das quatro partes de Iapaõ cousa ã nunca foi ouuida des dos antigos ate gora o que sem duuida he admirauel o fauor do Ceo e cousa de grande admiraçaõ, de ã grandemête me alegro. Soube tambẽ ã os Padres, ã estaõ nesses reinos recebẽ muitos fauores de V. A. e cõ o resplãdor de seu fauor uaõ promulgãdo, pregando, e ensinãdo a lei pera saluar aos homẽs, os quais saõ religiosos destes reinos dignos de ueneraçãõ, ã cõforme a seu instituto passã a todas as partes do mũdo pera ensinar o uerdadr.º caminho da saluaçaõ e cõ saber delles os fauores ã V. A. lhes faz me tenho alegrado muito. E por elles me pedirẽ ã escreuesse a Vossa Alteza e lhe mãdasse hũ ãbaixador dandolhe as graças disto, folguei de o fazer. E porq.<sup>to\*\*)</sup> o Padre Visitador estes ãnos atras foi outra uez a esses reinos de V. A. e he ia conhecido nessa terra lhe ãcarreguei esta embaixada, e peço a V. A. por esta carta ã daqui adiante mais, e mais os queira fauorecer. E podendo destes reinos seruir a Vossa alteza em alguã cousa, folgarei muito de o fazer. Em sinal de amor mãdo a V. A. dous mõtantes; 2 corpos de armas; 2 caualos cõ seus arreos; 2 pistoletes, e hũ tersado; 2 pares de guademecins dourados, e huã tenda pera campo. Feita nestes reinos da India no mes de Abril do anno de 1588.

Viso Rey da India (assinatura)

\*) senhores.

\*\*\*) porquanto.

いとも高貴にして強大なる関白殿

インド副王ドン・ドゥアルテ

陸地の遠い隔たりによってこれまで私たちの間には交流がなかったけれども、殿下の諸国に滞在するパードレたちの書信により、遠隔の当地にまで響き渡る、殿下の勝利と業績、その名声と声望の大

なること、さらには、殿下が日本の四方の諸侯ならびに諸国をその版図のもとに服従せしめられた次第を、私はつとに承知するものである。かくの如きことは古より今に至るまで未聞のことに属し、驚くべき天の恵みであること疑いなく、大いに讃嘆すべき事柄であって、私はこれを慶賀至極に存ずる。私はまた、貴国に滞在するパードレたちが殿下から数々の御好意を受け、その輝かしき恩恵を得て、人々を救済するための教えを宣布し説法し教示しつつあることを承知している。彼らは当諸国の修道士にして尊敬に値する者どもであり、自らの掟に従い、真実の救いの道を教えるために、世界のあらゆる地に渡っているのである。私は彼らから、殿下が彼らに施して下さった御好意を聞き知り、これを深く喜びとして今に至っている。彼らは、私が殿下宛に書状をしたため、殿下のもとへ使節を遣わし、上の如き恩恵に謝意を表して欲しいと願ってきたので、私は喜んでこの要望を受け入れた。パードレ・ヴィジタドール〔巡察使ヴァリニャーノ〕は今を去る数年前、殿下の諸国に赴いたことがあり、貴国においてすでに知られてもいるので、私は彼にこの使節の任を委ねた。本状によって殿下に冀わくは、今後、ますます彼らを優遇し給わんことを。もし当諸国として何事か殿下へ尽くしうることがあるとすれば、私は欣然としてそれを行なうであろう。ここに親愛の印しとして、モンタンテ刀〔広刃の長剣〕二振り、甲冑二領、馬具付き馬二頭、拳銃二挺にテルサド刀〔広刃の短剣〕一振り、金飾りの装飾掛布\*)二対、野営用天幕一張りを殿下へ送呈する。当インドの諸国において、1588年4月これをしたたむ。

インド副王（署名）

\*) 原語 *guademecins dourados*. この「金飾りの装飾掛布」は二対ともに伝存しないが、インド副王が秀吉に贈呈した品々を服飾史の視点から考証してこられた小笠原小枝女史（日本女子大学家政学部助教授）より、この原語に関する下問を受けたことがある。小笠原女史は、この「金飾りの装飾掛布二対」が秀吉によって裁断されてしまい、現在京都の高台寺に所蔵される重要文化財・豊臣秀吉所用「鳥獸文綴織陣羽織」として仕立て直されたのではないかと、との仮説を立てている（「豊臣秀吉所用の綴織陣羽織をめぐって」未刊論文）。この原語の歴史的な検証を通じて上記の仮説を実証する手掛かりを得ることはできないだろうか、との趣旨であった。

絨毯を含む装飾掛布——タペストリー——を意味する最も一般的な現代ポルトガル語の語彙は *tapeçaria* であり、これが一六世紀にも使われたことはルイス・デ・カモンイスの『ウズ・ルジアダス』の第IX歌60に次の用例があることから判明する。

Pois a tapeçaria bela e fina / Com que se cobre o rústico terreno, / Faz ser a de Aqueménia menos dina, [.....]  
つぎには、田園をしきつめている／美しいみごとなじゅうたんを見ると、／アケメニア〔ペルシア〕のそれも色あせてしまう。（小林英夫・池上岑夫・岡村多希子訳『ウズ・ルジアダス（ルシタニアの人びと）』岩波書店、1978年、350頁）

ところが、インド副王の秀吉宛親書ではその語彙が使われず、*guademecins*（単数形は *guademecim*）という風変わりとも思われる語彙が敢えて用いられている。モラエスの辞書には、この語彙が *Antiga tapeçaria, de couro pintado e dourado* と定義されている（Antônio de Moraes Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, V, Lisboa, Editorial Confluência, décima edição, 1953, p.600）。「彩色され金泥（または金箔）で飾られた革製の古風な装飾掛布」という意味。アウレリオの辞書には、もう少し詳しく *Tapeçaria antiga, de couro com pinturas e dourados, originária de Gadamés, cidade da Tripolitânia* という語義が与えられている（Aurélio Buarque de Holanda Ferreira, *Novo Dicionário da Língua Portuguesa*, p.871）。「トリポリタニア地方〔リビア北部〕の都市であるガダミスに発祥する、彩色され金泥（または金箔）で飾られた革製の古い装飾掛布」という意味。しかもこの語彙の語源はアラビア語である旨が、いずれの辞書にも注記されている。

ところが、リビアの *Ghadamis*（ガダーミス）と呼ばれるこの町について、*E. J. Brill's First Encyclopaedia of Islam 1913-1936* (Leiden, etc., E. J. Brill, 1987, III, p.133) は、その起源をアレキサンダー大王の時代に溯ることができ、*Cydamus*（キュダームス）と呼ばれていたとする。とすれば、*guademecim* の語源である地名 *Ghadamis* はギリシア語と考えられる *Cydamus* に由来し、アラビア語起源ではないことになる。事実、gh, d, m, s の四個の根から成る純粋なアラビア語を想定することは難しいのである。上記二種のポルトガル語辞書が *guademecim* をアラビア語起源としているのは、アラビア語 *wadi*（川、谷の意）に由来する [guad-] なる音節を含む地名が、イスパニ



アに多数あることからの連想にすぎないであろうと考えられる（上野悌嗣氏の教示による）。

さらに、上記の二例ではいずれも「革製の」と定義されているが、マシャードの語源辞典に挙げられた用例（cf. José Pedro Machado, *Dicionário Etimológico da Língua Portuguesa*, III, Lisboa, Livros Horizonte, quarta edição, 1987, p.183）を見ると、1364年の史料に *godomeçil de cojro* と「革製の」という修飾句が付いた用例も見つかる由なので、*guademecim* が必ず「革製」であったとも言いきれないようである。秀吉に贈呈されたものも別段革製ではなかったのかも知れない。ともかくこの装飾掛布が、ヨーロッパ製のそれとはデザイン・材質ともに異なるイスラム文明圏の産物であったらしいことは、ほぼ確かなようである。ちなみに、前記「鳥獣文綴織陣羽織」の材質は絹・金銀糸、出自は一六世紀のイランと、服飾史の専門家によって考証されている。

これと併せて「野営用天幕一張り」が贈呈されたことについて、西アジアのイスラム文明圏の人々にとっては、タペストリーは天幕内の装飾にも不可欠とされていたから、この二種の贈呈品が組み合わされたことは決して無意味な取り合わせではないそうだ。ところが、日本には室内をタペストリーで飾り立てる習慣・伝統がなかったから、秀吉はこれの本来的な用途にまったく考慮を払わぬまま、せっかくの副王からの贈り物を大胆にも裁断して陣羽織——戦国時代には、奇抜な素材と斬新にして華麗なデザインを有する陣羽織が群雄から大いに好まれた——に仕立て直してしまったのではないかと小笠原女史は結論を慎重に保留しつつ推測する。ただしこの場合、*guademecim* と呼ばれる「装飾掛布」が革製であった可能性の強いことが気懸かりとなる。